

立命館大学 文学研究科

Ritsumeikan University
Graduate School of Letters

<http://www.ritsumeai.ac.jp/gslt/>



Graduate School
of Letters

文学研究科

Graduate School of Letters

人文学専攻

Major in Humanities

■	哲	学	専	修	■
■	教	育	人	間	学
■	日	本	文	学	専
■	中	国	文	学	・
■	英	米	文	学	専
■	日	本	史	学	専
■	東	洋	史	学	専
■	西	洋	史	学	専
■	文	化	動	態	学
■	現	代	東	ア	ジ
■	英	語	園	文	化

行動文化情報学専攻

Major in Informatics of Behavior and Cultures

■	地	理	学	専	修	■
■	文	化	情	報	学	専
■	考	古	学	・	文	化

文学研究科への 進学をお考えのみなさまへ



立命館大学文学研究科長
米山 裕

21世紀に入り、グローバル化と情報化が急速に進展し、人文学は大きな転換点を迎えました。長い蓄積のある人文学研究をもとにして、さらに現代的課題に応えるための人文学が国際的に模索されています。文学研究科は、こうした学問的変容のなかで教育および研究を質的に向上させることによって将来を展望しようとしています。

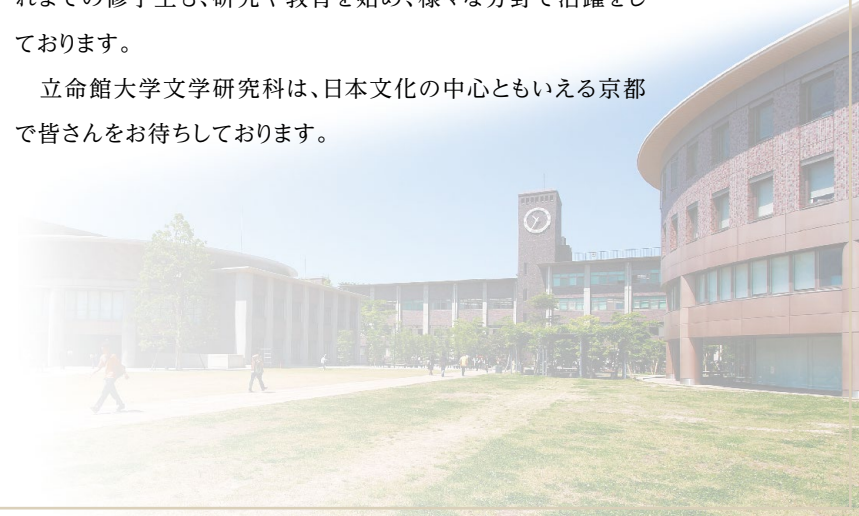
文学研究科では、2014年度より人文学専攻に加わった「英語圏文化専修」「現代東アジア言語・文化学専修」および行動文化情報学専攻の「文化情報学専修」「考古学・文化遺産専修」において、時代の要請に応え得る新たな知の枠組みを構築しているところです。この新たな人文学のフィールドで、意欲あるみなさんと一緒に新しい文学研究科を創造したいと思います。



立命館大学文学部長
上野 隆三

60年あまりの歴史を持つ立命館大学文学研究科は多数の教員を有しており、人文学の研究分野を幅広くカバーしています。学生にとっては、人文学に関するどのような対象でも研究できる組織であると言えます。特に、国際化や学際化には早くから取り組んできており、今後も海外の大学院との研究交流などを一層活発に行っていきたいと思っています。伝統に裏打ちされた研究と新しい分野の研究を総合的に進めることによって、より高い到達点が得られると確信しておりますし、これまでの修了生も、研究や教育を始め、様々な分野で活躍しております。

立命館大学文学研究科は、日本文化の中心ともいえる京都で皆さんをお待ちしております。

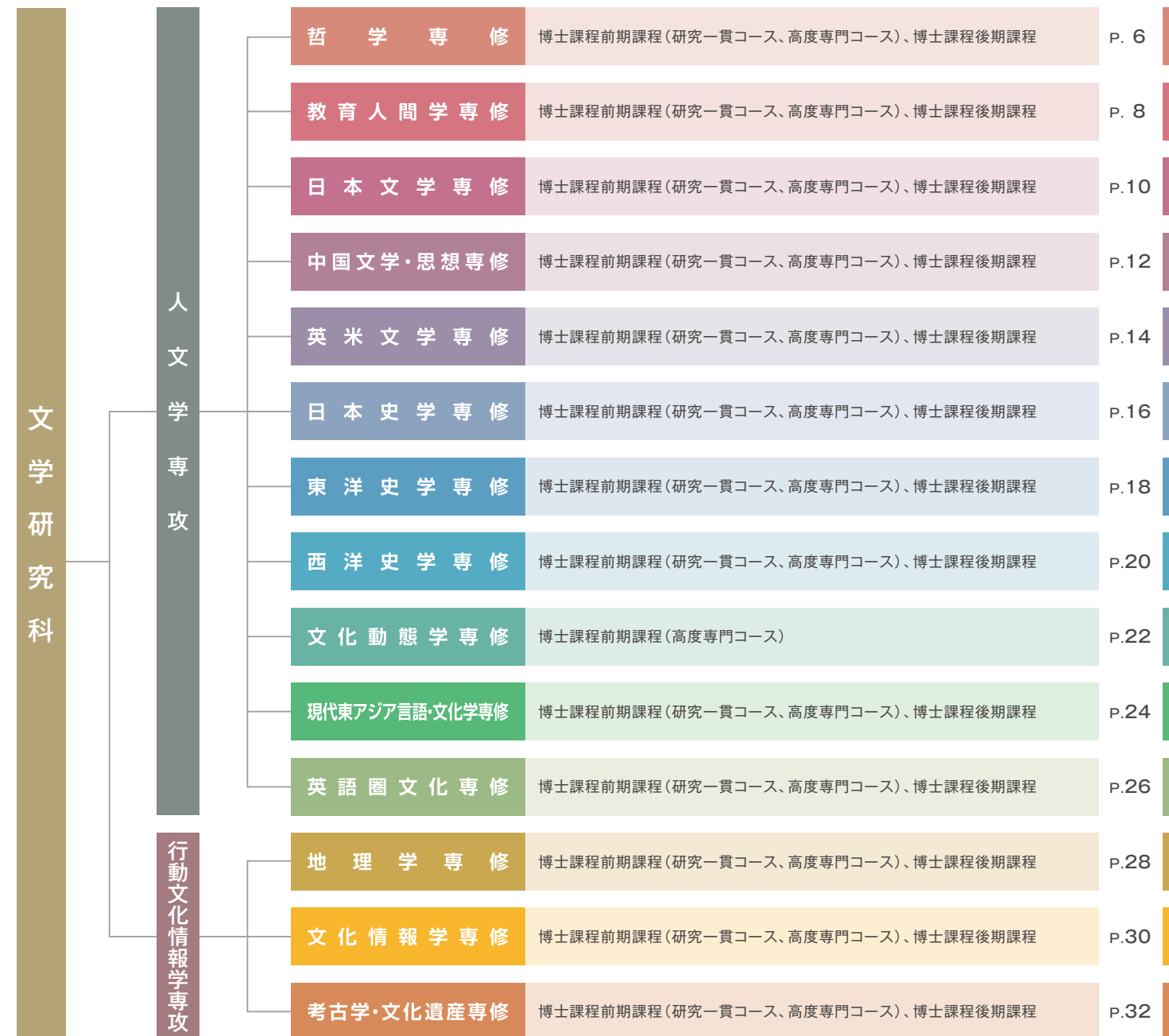


文学研究科

Graduate School of Letters

多様な教育・研究を生み出す2つの専攻、14の専修

〈文学研究科の研究教育組織〉



<http://www.ritsumeai.ac.jp/gslt/>

教員紹介・カリキュラム・開講科目の概要、取得可能な資格、修了生の進路就職先などの情報を掲載しています。

理念および目的

1. 人材育成目的

【研究科全体】
「人間とは何か」を追求する人文学の意義がますます増大する現代社会において、人文学の諸分野における専門的・国際的な研究を展開することによって、学界の第一線に立つ研究者、および研究を通じて培った知識や経験を生かして社会で活躍する高度な職業人を育成することを目的とする。

【博士課程前期課程】
〈人文学専攻〉
研究一貫コースでは、人文学の各専門分野に関する最新の研究手法や知識を身につけることを通じて、研究者となるための基本的素養を習得するとともに、修了後に博士課程後期課程へ進学できる人材を育成する。
高度専門コースでは、人文学の各専門分野に関する研究手法や知識を身につけることを通じて、社会的要請に対応する知識・技能・経験を持ち、現代の多様な問題に対処できる高度な職業人となる人材を育成する。

〈行動文化情報学専攻〉
研究一貫コースでは、人文学と情報学を有機的に統合し、かつ人文学や情報学の各専門分野に関する最新の研究手法や知識を身につけることを通じて、研究者となるための基本的素養を習得するとともに、修了後に博士課程後期課程へ進学できる人材を育成する。
高度専門コースでは、人文学と情報学を有機的に統合し、かつ人文学や情報学の各専門分野に関する研究手法や知識を身につけることを通じて、社会的要請に対応する知識・技能・経験を持ち、現代の多様な問題に対処できる高度な職業人となる人材を育成する。

【博士課程後期課程】
〈人文学専攻〉
人文学の各専門分野に関する高度な知識や技能（文献読解力、調査力、語学力、資料収集・分析力など）を備え、かつ学際的研究や社会科学・自然科学の分野との共同研究などにも対処でき、その成果を社会に積極的に発信できる高度な専門家となる人材を育成する。

〈行動文化情報学専攻〉
人文学と情報学の各専門分野に関する高度な知識や技能（文献読解力、調査力、語学力、資料収集・分析力、フィールドワークに関する能力など）を備え、かつ学際的研究や社会科学・自然科学の分野との共同研究などにも対処でき、その成果を情報技術をも活用して社会に積極的に発信できる高度な専門家となる人材を育成する。

2. ディプロマ・ポリシー

【研究科全体】
文学研究科では、「人材育成目的」をふまえて、大学院生が修了時に身につけておくべき能力（＝教育目標）を定めている。研究科則が規定する単位の取得、および学位論文の審査合格によって、上記教育目標の達成と見なし、博士課程前期課程においては修士、博士課程後期課程においては博士の学位を授与する。

教育目標	
【博士課程前期課程】	【博士課程後期課程】
(1) 現代社会における人文学の意義を理解している（関心・意欲）	(1) 現代社会における人文学の意義を深く理解している（関心・意欲）
(2) 人文学を学び、研究活動を進めるうえで必要となる実践的な語学力を習得している（技能・態度）	(2) 人文学を学び、研究活動を進めるうえで必要となる実践的かつ高度な語学力を習得している（技能・態度）
(3) 人文学を学び、研究活動を進めるうえで不可欠となる、基礎的な知識を習得している（知識・理解）	(3) 各専修の専門性に合わせた高度な研究手法や知識を身につけている（知識・技能）
(4) 各専修の専門性に合わせた研究手法や知識を身につけている（知識・技能）	(4) 独創的な分析や議論をおこなって、学界に寄与する高度な研究や議論をおこなうことができる（知識・表現）
(5) 学際的・国際的な視野を有している（態度・判断）	(5) 学際的・国際的な視野に立った研究や行動をとることができる（態度・判断）

学位論文は、以下の基準により評価する。	
【修士論文】	【博士論文】
(1) 学術上の創意工夫・独創性	(1) 学術上の創意工夫・独創性
(2) 研究テーマの学問的意義・適切性	(2) 学界に対する学術上の寄与
(3) 先行研究の取り扱いの適切さ	(3) 研究テーマの学問的意義・適切性
(4) 文献、資料、調査等の取り扱いの適切さ	(4) 先行研究の取り扱いの適切さ
(5) 論文の体系性	(5) 文献、資料、調査等の取り扱いの適切さ
(6) 論旨の明確性・一貫性・整合性	(6) 論文の体系性
(7) 表現・表記法の適切さ	(7) 論旨の明確性・一貫性・整合性
	(8) 表現・表記法の適切さ

3. カリキュラム・ポリシー

博士課程 前期課程	文学研究科では教育目標を達成するため、博士課程前期課程の院生は「共通科目」、「専修科目」および「特別研究科目」で学ぶ。 「共通科目」では、人文学の意義の理解や実践的な語学力の育成、そして基礎的な知識の習得のため、講義や実習、外国語科目を通じて学ぶ。「共通科目」の中には、専修免許状を取得して広く教育現場で活躍するための科目や、専門性を生かして国際的に活躍するための語学力を養う科目、高度職業人としてのキャリア意識を構築していく科目などが含まれる。 「専修科目」では、各分野における最新の研究や知見を習得するため、及び学際的・国際的な視野を得るために、講義や文献講読、実習を通じて学ぶ。 「特別研究科目」では、研究指導を受けながら、修士論文の執筆に向けた研究活動に取り組む。
博士課程 後期課程	文学研究科では教育目標を達成するため、博士課程後期課程の院生は「特別研究」で学ぶ。 「特別研究」では、研究推進のための基盤となる知識や能力の習得・涵養のため、指導教員からの細かな指導を受けながら研究活動に取り組む。

4. アドミッション・ポリシー

文学研究科では、以下のような人材を求める。	
【博士課程前期課程】 〈人文学専攻〉 《研究一貫コース》 (1) 深い教養と豊かな想像力を培う意志のある者 (2) 人文学に関する、学士課程修了レベルの知識を有している者 (3) 人文学の諸問題の解明のための、広い視野と明確な問題意識を抱いている者 (4) 各領域の研究者となるために必要とされる、語学力やプレゼンテーション能力の習得を積極的にめざす者 (5) 各専門分野における最新の研究手法や知識を身につけることを通じて、研究者となるための基本的力量の取得を積極的にめざす者	《高度専門コース》 (1) 深い教養と豊かな想像力を培う意志のある者 (2) 人文学に関する、学士課程修了レベルの知識を有している者 (3) 人文学の諸問題の解明のための、広い視野と明確な問題意識を抱いている者 (4) 専門的な知識を生かして社会で活躍するために不可欠となる、語学力やプレゼンテーション能力の習得を積極的にめざす者 (5) 現代の多様な問題に対処できる知識・技能・経験を積極的に積む意志のある者

〈行動文化情報学専攻〉 《研究一貫コース》 (1) 深い教養と豊かな想像力を培う意志のある者 (2) 人文学と情報学に関する、学士課程修了レベルの知識を有している者 (3) 人文学の諸問題の解明のための、広い視野と明確な問題意識を抱いている者 (4) 人文学の諸領域のデータを、情報学の観点から対処することに興味を抱いている者 (5) 各領域の研究者となるために必要とされる、語学力やプレゼンテーション能力の習得を積極的にめざす者 (6) 各専門分野における最新の研究手法や知識を身につけることを通じて、研究者となるための基本的力量の取得を積極的にめざす者	《高度専門コース》 (1) 深い教養と豊かな想像力を培う意志のある者 (2) 人文学と情報学に関する、学士課程修了レベルの知識を有している者 (3) 人文学の諸問題の解明のための、広い視野と明確な問題意識を抱いている者 (4) 人文学の諸領域のデータを、情報学の観点から対処することに興味を抱いている者 (5) 専門的な知識を生かして社会で活躍するために不可欠となる、語学力やプレゼンテーション能力の習得を積極的にめざす者 (6) 現代の多様な問題に対処できる知識・技能・経験を積極的に積む意志のある者
---	---

【博士課程後期課程】 〈人文学専攻〉 (1) 人文学に関して、自己の研究を進めるための基礎となる専門的な知識を有している者 (2) 従来の研究には見られない、高度で独創的な研究を展開する意欲を有する者 (3) 学際的・総合的な研究の構築のため、他の学問領域にも幅広い関心を持つ者	〈行動文化情報学専攻〉 (1) 人文学や情報学に関して、自己の研究を進めるための基礎となる専門的な知識を有している者 (2) 従来の研究には見られない、高度で独創的な研究を展開する意欲を有する者 (3) 学際的・総合的な研究の構築のため、他の学問領域にも幅広い関心を持つ者 (4) 人文学に情報系研究の知見を融合させるための、研究に関する柔軟性を持つ者
---	--

Dual Master's Degree Program (DMDP)

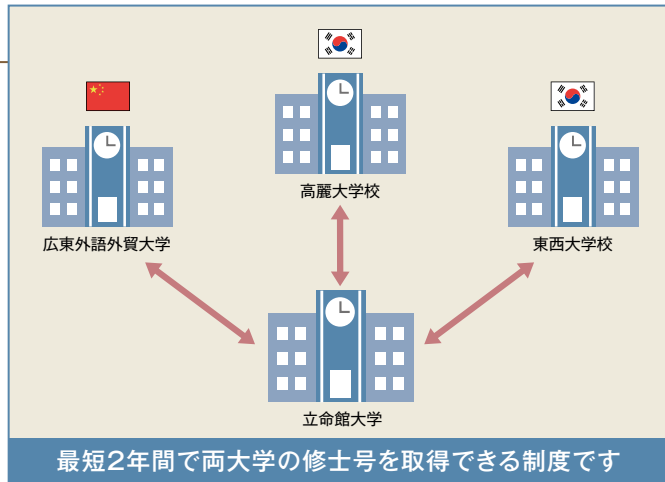
国を越えた2つの修士学位を取得

文学研究科は、海外との研究交流などの国際化を重要課題と位置づけ、大学院生にグローバルな視点での学修を可能とするために、海外の大学との間でDual Master's Degree Program (DMDP)を実施しています。このプログラムは、グローバル化する国際社会で活躍する人材を育てることを目的として発足したもので、2年間の博士課程前期課程在学中に海外の大学院に正規留学することによって、最短2年で両大学の大学院から修士号を取得できる画期的な制度です。中国の広東外語外貿大学、韓国高麗大学校、韓国東西大学校とDMDPの協定を締結しています。

本学大学院生は本学に授業料を納付し、留学先の試験料、入学金、授業料は免除されます。また本学大学院生には「立命館大学大学院留学協定等にもとづく留学プログラムに対する奨学金規程」にもとづき、奨学金が支給されます。

■ 本学大学院生の学位取得までの標準モデル

	M1春学期	M1秋学期	M2春学期	M2秋学期
留学先大学院		学 修	学 修	
立 命 館 大 学	学 修			学 修



広東外語外貿大学



高麗大学校



東西大学校

さらにDMDPとは別に、立命館大学が実施する各種の海外留学プログラムを利用することができます。

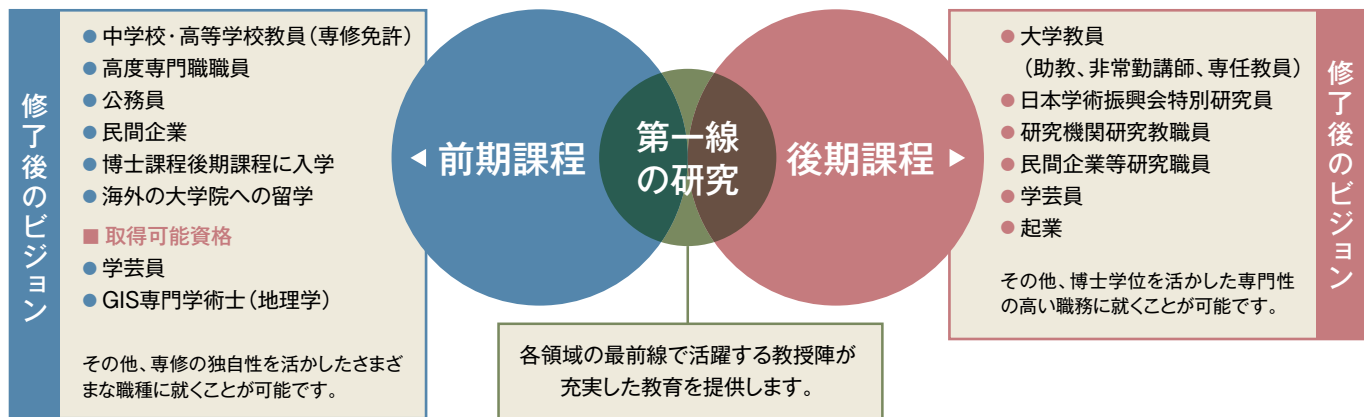
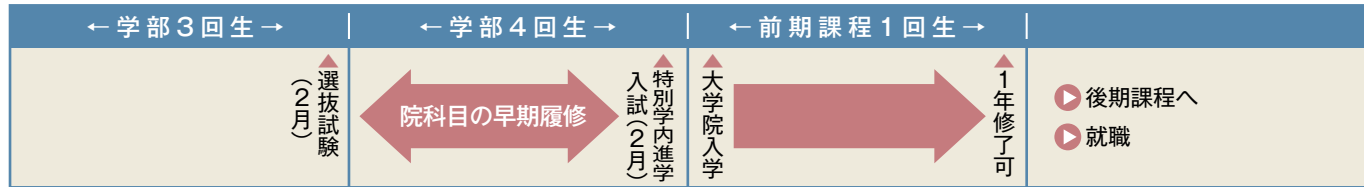
詳細は本学海外留学ホームページを参照してください。 <http://www.ritsumei.ac.jp/studyabroad/>

1年間で前期課程を修了するプログラム

文学研究科には「大学院進学プログラム」という制度があります。この制度では、立命館大学文学部の3回生時に「大学院進学プログラム」の選抜試験に合格すると、4回生時に文学研究科の科目を受講することができます。その後、文学研究科に入学すると4回生時に取得した大学院科目の単位(上限あり)が認定されます(入学には「特別学内進学入学試験」を受験し合格する必要があります)。

この制度を利用すれば、4回生時に大学院の高度な授業に参加し今後の研究に活かすことができるとともに、文学研究科に入学時点で前期課程修了に必要な単位の一部をすでに取得していることになります。それにより、残りの必要単位の取得および修士論文審査に合格すれば最短1年間での修了が可能です。

■ 立命館大学文学部3回生対象 大学院進学プログラム



<http://www.ritsumei.ac.jp/gslt/>

修了生の主な進路・就職先や資格に関する詳細情報は文学研究科ホームページに掲載しています。

■ キャリア形成 ■

専修免許

専修免許とは、教員の普通免許状の一種で、一種免許状(学部を卒業することで取得できる免許状)を基礎にして、大学院で所定の単位を修得し、修了することで取得できる免許状です。つまり、専修免許状は一種免許状の上位免許です。現在の教員採用試験において必要とされる免許状は一

種免許状がほとんどですが、一方で高等学校を中心に、指導教科に関する専門的な知識や力量が求められる傾向が高まりつつあり、一種免許状を基礎に、博士課程前期課程での高度な学習を通じて得た知見を教壇で活かしたいと願う人にとって必要な免許状といえます。

文学研究科で取得できる専修免許状

専攻	中学校			高等学校			
	国語	英語	社会	国語	英語	地理歴史	公民
人文学専攻	●	●	●	●	●	●	●
行動文化情報学専攻	—	—	●	—	—	●	—

文学研究科では専攻に共通する科目として、大学院で学修する専門研究を教育実践につなげるための科目として、「教育実践研究(英語)Ⅰ」「教育実践研究(英語)Ⅱ」「教育実践研究(国語)Ⅰ」「教育実践研究(国語)Ⅱ」「教育実践研究(地理)Ⅰ」「教育実践研究(地理)Ⅱ」を開講しています。文学研究科において教員を目指す学生にとって、将来の教育実践に有効な科目ですので、積極的な受講が望まれます。

その他専攻共通科目として、国際的な舞台で専門性を活かして活躍するための語学力を養う科目が開講されています(「実践英語Ⅰ」「実践英語Ⅱ」「実践中国語Ⅰ」「実践中国語Ⅱ」「実践朝鮮語Ⅰ」「実践朝鮮語Ⅱ」)。

また、博士学位論文を提出し、修了後第一線の研究者として活躍するために必要な基礎的能力(ライティング・プレゼンテーション能力等)を養うための科目である「アカデミック・スキルズⅠ」「アカデミック・スキルズⅡ」があります。

学芸員資格取得希望者のための科目

- 博物館コミュニケーション論
- 学芸員のためのデジタル技術

研究者としてのスキルを学ぶ科目

- アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ

論文執筆・学会発表のために外国語を学ぶ科目

- 実践英語Ⅰ・Ⅱ
- 実践中国語Ⅰ・Ⅱ
- 実践朝鮮語Ⅰ・Ⅱ

研究のためにデジタル技術や統計処理を学ぶ科目

- テキスト情報の処理
- デジタル・アーカイブⅠ・Ⅱ
- 統計解析演習Ⅰ・Ⅱ

前期課程 ● 修了後のビジョン

- 中学・高等学校教員(専修免許)
- 高度専門職職員
- 公務員
- 民間企業
- 博士課程後期課程に入学
- 海外の大学院への留学

後期課程 ● 修了後のビジョン

- 大学教員
- 日本学術振興会特別研究員
- 研究機関研究教職員
- 民間企業等研究職員
- 学芸員
- 起業

(詳細は各専修を紹介したページに記載された院生の進路状況を参照してください。)

哲学専修

Philosophy

哲学専修では、西洋哲学を中心に、高度に専門的な研究と教育を行っています。

教学概要

哲学専修では、西洋哲学を中心に、現象学、フランス現代哲学、18世紀イギリス哲学、倫理学、応用倫理学の研究と教育を行っています。原書講読や講義などを中心として、博士課程前期課程では、専門的な内容の修士論文の執筆のための指導を行います。また博士課程後期

課程では、教員の共同研究プロジェクトなどにも参加しつつ、学会発表などを積極に行い、研究者として自立するように指導を行い、博士論文の執筆を準備します。

教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
谷 徹 教授	現象学、現代哲学	意識と自然の関係の現象学的分析から出発して、その間文化的展開を試みています。「経験」と「文化」（とりわけ「言語」）の「間」でどのような関係が生じ、文化と文化の「間」でどのような関係が生じるか、その際の人間（自己と他人）の機能・役割は何か、を問うています。著書『意識の自然』（勁草書房）など。
北尾 宏之 教授	倫理学、カント哲学、応用倫理	カント倫理学・政治哲学の諸問題、とりわけ道徳規範および法を基礎づける論証構造の問題を中心に研究しています。
伊勢 俊彦 教授	英語圏を中心とした近現代哲学	ヒュームの哲学を軸に、英語圏を中心とした近現代哲学、最近はとくに人間や動物のいのちにかかわるテーマを研究しています。訳書にヒューム『人間本性論』2・3巻（共訳、法政大学出版局）。
加國 尚志 教授	フランス哲学、フランス現代思想	メルロ＝ポンティ存在論における言語の問題、とりわけ文学の言語が彼の哲学において持つ意味を研究しています。著書『自然の現象学』『沈黙の詩法』（いずれも晃洋書房）など。
林 芳紀 准教授	倫理学、応用倫理学、政治哲学	生命倫理・スポーツ倫理の問題から、社会正義などの政治哲学について研究を進めています。著書『入門・医療倫理Ⅱ』（共著、勁草書房）など。
亀井 大輔 准教授	フランス哲学、現代思想	ジャック・デリダの〈脱構築〉の思想の成立や展開過程を明らかにし、現代におけるその可能性を追究する研究を行っています。デリダの翻訳（共訳）としてデリダ『獣と主権者Ⅰ、Ⅱ』（白水社）『デリダ、脱構築を語る』（岩波書店）など。

特色ある授業・活動

哲学専修の「特別研究」では、博士課程前期課程、博士課程後期課程のそれぞれの院生に専修教員全員が指導を行います。具体的には、各課程の院生がそれぞれ年数回程度の発表を行い、専修教員全員及び各課程院生全員で意見や批判を加え、学会発表に準じた質疑応答を行います。そのことを通じて論文作成のための研究を指導するとともに、発表能力を身につけ、研究成果公表の準備を行います。

また、博士課程後期課程院生は教員の主催する共同研究プロジェクトに参加し、そこで研究を行うとともに、プロジェクト型の研究を身につけ、研究者としての実力を養います。



修了生の主な就職先・就職状況

●大学教員 ●教育関係 ●新聞社 ●コンピューター関係 など

修了生の紹介

立命館大学大学院
文学研究科哲学専修
博士課程後期課程／日本学術振興会特別研究員DC

横田 祐美子さん

〈研究テーマ〉
ジョルジュ・バタイユの
「内的体験」という思想を
哲学の文脈のなかで捉え直すこと。

哲学専修で学んだ思い出

外国語の原書講読の授業が特に面白かったです。毎週欠かさず訳すことで、外国語文献を読む力がつきまし、外国語への苦手意識がなくなりました。

現在の研究

博士論文執筆に向けて、現在はジョルジュ・バタイユの思想をアルケオロジ（始原を追求める学）として再解釈する研究をしています。

入学希望者へのメッセージ

大学院では「先生に教えてもらう」ではなく「自ら学ぶ」という主体的な取り組み方が最も必要とされています。授業以外にも研究室の仲間と研究会を組織したり、他大学の院生とも交流をしたりすると大学院での学びがさらに充実すると思います。

立命館大学大学院
文学研究科哲学専修
博士課程後期課程

松田 智裕さん

〈研究テーマ〉
ジャック・デリダの思想における
現象学受容と生成の問題

哲学専修で学んだ思い出

博士課程前期課程に進もうと考えたそもその動機は、卒業論文で扱ったテーマをより深めるためというのがありますが、なによりもまず学部で学んでいゆる「研究」を実感できていなかったということがあります。その点、大学院に進んでから自分の目指したい研究者像が少しずつ固まってきました。目の前にあるデータを丁寧に分析し、そこから問題点を炙り出し、整理するというのは研究者に要求される基本的な能力です。私の専門とする哲学の場合、これらはテキストの精緻な読解から得られるものでした。大学院の授業では、これらの基本的な能力を伸ばすために、西洋の哲学者たちのテキストを原文で読み、二次文献を参照しながら自分なりに整理し、それを先生たちにぶつけることを繰り返しました。そのため、はじめのうちは、予習だけで一週間が終わることも多々ありました。しかし今振り返ると、あの時の経験が自分の研究の土台を作ってくれたのだと思います。

現在の研究

フランスの哲学者ジャック・デリダにおける生成の問題を、フランスにおける現象学受容の観点から、再構築することをテーマにしています。具体的には、眼の前に現れていない事象が私たちの生に見えないところで作用し、それまでにない別の事象として私たちの前に現れてくるその生成プロセスに関する理論として、デリダの思想を読み解くことに関心をもっています。

入学希望者へのメッセージ

大学院の授業では研究者に必要な基本的な素養を身につけることから始まります。授業に参加し、先生の解説を一方的に受け入れ、それに満足するだけでは、研究はできません。自分なりに分析し、こういう観点から見たらどうなるのかと先生に提案し、議論を交わす、そうした態度が求められます。そのためには、分析方法に関する知識はもちろん、語学や論文執筆の仕方といった基礎的な力を向上させていく必要があります。また、自分の専門に関連する情報を絶えず吸収し、問題がどこにあるのかを整理していかななくてはなりません。いわゆる新しい研究とは、そうした専門研究の積み重ねを通じてはじめて可能となるものです。みなさんの研究のご成功を心よりお祈りしています。

中国福建省福州大学外国語学院日本語学科教員・
立命館大学人文科学研究所客員研究員

黒岡 佳柁さん

〈研究テーマ〉
ハイデガーの「共存在」と「死」の研究、
およびそれに対する現代の欧米思想の
批判的観点を含めた「他者との共同性」の研究
〈博士論文題目〉
ハイデガーにおける「共存在」の研究
—「学」、「死」そして「われわれ」—

哲学専修で学んだ思い出

学部生の頃以上に、指導教員の先生や他の院生との交流の機会が増え、講義以外でも濃密な議論を交したことを覚えています。もちろん雑談も多々ありましたが、それを通じて、研究を進展させるヒントを得ることもあり、研究の幅が広がりました。また講演会などで、海外の研究者と関わったことも、魅力的な思い出として残っています。

現在の研究

在学時のテーマである共同体や死の問題を、「倫理」や「政治」という方面へ拡張しつつ研究しています。また同時に「主体」を巡る問題圏にも関心を寄せています。

入学希望者へのメッセージ

自身の研究テーマを一人で地道に探究する忍耐力と、研究で獲得したものを他者に伝え議論する社交性、この二つのバランスをとることができれば、研究は格段におもしろくなると思います。学ぶ喜びにあふれた研究生生活をお過ごしになることを期待しています。

教育人間学専修

Educational Anthropology

かかわりのなかで人が生まれ、育ち、老い、死にゆくことへの
驚きと共感から出発する、教育に関する人間学的研究。

教学概要

教育人間学専修は、こころの問題を軸として、「人間とは何か」「教育とは何か」という根本的な問いを相互に循環させつつ、「現代の教育をめぐる諸問題の人間学的総合研究」、より端的には、「新しい教育の人間観の創出を目指す研究」を推進しています。こころをめぐる問題や病理は、今日しばしばセンセーショナルな、過度に不安をあお

るような論調で語られがちです。しかし、教育人間学の研究にとって重要なのは、流行の「教育問題」の表層的な激しさや華々しさに惑わされて「効果」を短期間で測れるとうたう乱暴な知見や安逸な技術を求めることではなく、「人間と教育」への問いを、その現代的課題を見据えつつ、根源から徹底的に考究する研究力量の形成です。

教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野 ・ 研 究 の 特 色
鵜野 祐介 教授	伝承児童文学に関する教育人間学的研究が専門です。子どもをめぐる民俗学、文化人類学分野の研究から刺激を受けつつ、子守唄、わらべうた、昔話などの調査・分析を通して、子どものコスモロジーの解明を目指しています。
春日井 敏之 教授	子ども理解を土台にした臨床教育学、教育相談論が専門です。思春期の人格発達と支援関係、学校教育相談と開発的カウンセリング、教師の主体形成・変容プロセスをテーマとして研究、教育、実践を進めています。
鳶野 克己 教授	「人生」は自己の生の意味を紡ぎ出し物語る営みとして生きられます。こうした「物語ること」をめぐる教育人間学的研究が専門です。また人間に固有な笑いと泣き、ユーモアとかなしみの問題にも注目しています。
福原 浩之 教授	体験的教育人間学の立場から、青年期以降の心の教育について研究しています。現在の研究テーマの中心は、瞑想教育による意識の拡大が人格の統合や癒しにもたらす効果の理論的・実践的解明です。
山本 昌輝 教授	専門は臨床心理学で精神分析を研究しています。長年にわたる臨床経験から、事象の負の部分に注目しながら、人間の生き様、とくに受苦・受難の人間(homo patiens)の有りようを人間学的に研究しています。
加納 友子 准教授	東洋の身体論と西洋で発展した心身相関的治療法の研究成果をもとに、幼少期に由来する様々な問題に対処可能な新しい教育方法の開発をめざしています。

特色ある授業・活動

院生全員が参加し、発表された研究内容をめぐって、教員も交えて毎回議論が白熱する「特別研究」の授業は、本専修の自由闊達な研究教育風土を如実に現しています。「特別研究」では、研究発表と並行して一人ひとり院生に対して、指導教員による丁寧な個別指導も実施されます。

それぞれの研究テーマに則して、各院生が人間学的研究力量を着実に形成し、研究成果を公にしていくなために、高度な専門的知見を獲得し思考力を磨く理論系科目、技法や療法の背景にある思想や人間観も含めて理解を深める実習系科目など、多彩な科目群を提供しています。



修了生の主な就職先・就職状況

本専修修了者の進路は多岐にわたり、就く職域や従事する職務内容も多彩です。教育の諸問題を人間学の立場から研究する専修として、小学校から高等学校、特別支援学校までを含む教職につく修了生が少なくないのは当然ですが、官公庁、対人援助にかかわる施設でも専門

性を活かした職に就いています。また一般企業で活躍する修了者も珍しくありません。専修創設以来、多様な職域で高い就職率を保っています。また後期課程を終えて、大学で教鞭をとる修了生もいます。

修了生の紹介

 アクセンチュア 株式会社勤務 岩田 光史さん 2008年度博士課程前期課程修了 (修士論文題目) レヴィナスの他者論 —「非-応答」への応答責任を感じながら—	教育人間学専修で学んだ思い出 行き詰った研究を題材に、同期との間で何度も議論を重ねた経験は忘れない思い出です。倫理学を研究していた私としては、そうした「倫(なかま)」との繋がりは、研究室に独り籠って享受した時間同様、研究成果とは別の大切な財産となっています。 現在の仕事との関係 当然と言えば当然ですが、専修での知識が、現在のITコンサルタントの実務的な知識に直接関連していることはありません。ただ一方で、これらの仕事の根底には、ITシステム全体を丁寧に読み解く高い論理力と、利用者の思いを汲み取る深い対話力が必要です。こうした力は文献を丁寧に読み込むことや、研究会での対話を通じて備わったのだと思いますし、またこうした基礎的な力があつたからこそ、自分は専修とは全く別の分野の道でも、その道を一步一步、歩むことができているのだと思います。 入学予定者や在籍者へのメッセージ 就職時期におけるリクルート市場で自身の価値を高めるための手段として、大学院への進学を考える風潮は今も昔も少なくはありません。より高度な専門性を身につけ一線級な立場として、社会に貢献しようとする高尚な志は、深く感心するところで、立命館大学院はその志を満たす環境を十分に備えています。与えられた環境に感謝し、ぜひ目標を達するための努力を怠らないでください。 ただ一方で、大学院での学びには、こうした目的論的な議論に還元されない学びがあります。知らない本を1冊手に取り、読み切った後に写る世界の色の変化は、学ぶことそのものの高揚感を感じさせてくれる瞬間です。遊ぶことそのものを享楽していた頃の様に、童心に帰って学ぶことそのものを楽しんでください。埃をかぶって眠っている図書の本は、あなたが知らない世界を抱えながら、あなたに開けられることを待っています。そしてきっと立命館大学院はその時間を許してくれる場でもありますから。
 大分県 豊後高田市職員 (市民生活課) 安藤 友恵さん (現姓：渡邊) 2010年度博士課程前期課程修了 (修士論文題目) 悲哀—ある女性の心理過程の分析を通して—	教育人間学専修で学んだ思い出 私は、心理健康の分野で、人間の悲哀の問題を心理学的な分析を通じて解明する研究を進めました。私が研究課題に取り組む上で、専修の先生方は、絶えず懇切な助言と指導を下さいました。また熱心で温かい助手やスタッフ、共に研究を進める院生の皆さんの存在も私の研究にとって大きな支えでした。優れた研究環境にある教育人間学専修で研究できたことを私は誇りに思うとともに心から感謝しています。 現在の仕事との関係 私は現在、故郷の市職員として人々の暮らしが豊かになり、地域が活性化するように日々業務に励んでいます。一見、市民生活から遠いような文書作成等の仕事も、現状を把握し、改善するための気づきとなります。状況を的確に理解し、緻密に計画し行動することは大学院での地道な研究と重なります。身につけてきた姿勢や考え方をさらに鍛錬し、今後も初心を忘れず充実した行政サービスにつなげていきたいと思っています。 入学予定者や在籍者へのメッセージ 教育人間学専修には、院生一人ひとりが自身のテーマに基づいて教育人間学という新しい学問を探究する姿勢が最大限尊重されているという大きな魅力があります。先生方の学問的立場や方法論も多彩です。「特別研究」の授業では、先生方と院生の様々な考え方、言葉が共鳴し、院生の人間的成長を含め研究の質を高めてくれました。
 石川県立 いしかわ特別支援学校教諭 朝倉 貴映さん 2012年度博士課程前期課程修了 (修士論文題目) 自己肯定感に関する一考察 —自己肯定感という こたわりからの解放—	教育人間学専修で学んだ思い出 学部では、東洋史を専攻しましたが、教職を志望していたこともあり、臨床教育学分野の学問的見識と実践的力量を磨くべく、教育人間学専修の博士課程前期課程に進学しました。大学院では自己肯定感の育まれ方について研究を進めました。直接の指導教員からの熱心で的確な研究指導はもちろん、専修では様々な専門領域の先生方からも多くの知見を得ることができ、自身の問題意識と研究の質を一層高めることができました。 現在の仕事との関係 私は現在、特別支援学校で知的障害のある高校生の教育に携わっています。専修で学んだ教育と人間とのかかわりを深く考究する姿勢は、教育の原点とも言われる特別支援教育に携わる現在の私の実践にも活かされています。今後は実践を通じて、専修での研究で身につけた学問的姿勢をさらに磨いていきたいと思っています。 入学予定者や在籍者へのメッセージ 上にも述べましたが、教育人間学専修では、教育にかかわる様々な専門領域の先生方から研究上の助言や丁寧な指導を受けることができます。先生方の学問的姿勢と見識に触れ、院生は、自身の教育観・人間観を根本から見つめ直し、再構築していくことを促されます。こうした環境は、教職を目指す人にとってのみならず、ひろく対人援助の仕事に携わるための専門的力量を高める上で大変有意義だと思います。

日本文学専修

Japanese Literature

上代から近現代に至るまでの日本の文学作品群や日本語の研究を通して、日本人が持つ豊かな想像力の解明を目指します。

教学概要

文学も言語も時代によって変化し、それぞれの特徴を持ちながら、総体として日本文学、日本語が形成されてきました。もちろん、決して閉ざされた日本の中だけで生じたのではなく、外国との交流や異文化との接触の中で、大きな成果を上げてきたことは言うまでもありません。各時代の多様な文化や思想を背景に持って作品や言語が成立してきたことを今日につながる歴史として学び、日本の精神文化の精髓を明らかにしたいと考えています。

また、こうした姿勢で日本文化を見詰め直し、伝統的精神や現代的価値観の在り方などと深く切り結ぶ日本人の生き方についても探究し、我々が抱えている様々な課題に対応していくための「人間のありよう」を研究します。

教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
小椋 秀樹 教授	コーパス日本語学	表記のゆれの実態、要因を明らかにするとともに、変化の方向性についても考察し、戦後日本語の動態的研究につなげていきたいと考えています。
川崎 佐知子 教授	日本古典文学	『源氏物語』などの平安朝物語文学の古注釈書や享受史、奈良連歌、近世前期の近衛閑白家の文学や文化的営為を、文献学的見地から研究しています。
瀧本 和成 教授	日本近現代文学	20世紀初頭の文学・芸術および〈京都〉に於ける近現代文芸に関わる研究をしています。
田口 道昭 教授	日本近現代文学	明治期の詩歌と評論、とくに石川啄木や与謝野晶子ら『明星』派の文学の研究を続けています。
中本 大 教授	日本中世文学	特に「五山文学」と称される室町時代禅林文学や連歌、雪舟や狩野派などの美術史についても研究しています。
花崎 育代 教授	日本近現代文学	大岡昇平、三島由紀夫、太宰治など戦後文学を中心に、作家の原稿草稿を読む生成研究も含め、テキスト／作品の総合的な研究を続けています。
藤原 享和 教授	上代(古代前期)文学	8世紀以前の日本文学について『古事記』や『続日本紀』などに記載された歌謡を中心に研究しています。そのテキストの中で歌謡が担っている機能を解明することが中心課題です。
内藤 由直 准教授	日本近代文学	日本の近代文学が国家のイデオロギー装置として機能した役割を、批判的に検証する研究を行っています。
中川 成美 特別任用教授	日本近現代文学・文化	視覚文化、ジェンダー・クィア理論、トラベル・ライティングなど、文学的想像力を喚起するさまざまな状況や構造について研究しています。

特色ある授業・活動

日本文学専修に所属する教員、大学院生をはじめ、学部生、修了生による学会組織として立命館大学日本文学会があります。1964年創立の歴史ある学会で、次のような活動を行っています。

1. 学会誌『論究日本文学』の刊行(毎年5月、12月)
2. 立命館大学日本文学会大会の開催(毎年6月)
3. 研究例会の開催(毎年4月、9月、12月)
4. 国語教育ゼミナール(毎年1月、8月)

『論究日本文学』、大会、研究例会は、大学院生が研究成果を発表する重要な場となっています。大会、研究例会には、修了生も参加して活発な討議が行われます。国語教育ゼミナールには、中学・高校の国語科教員を目指す大学院生、学部生と国語科教員として活躍している修了生が参加し、教育実習報告や授業の実践報告を行います。国語科教員としての心構えやスキルを学ぶことのできる貴重な場となっています。

修了生の主な進路

博士課程前期課程修了者の主な進路	博士課程後期課程修了者の主な進路
● 中学校・高校教員	● 中学校・高校教員
● 一般企業	● 大学教員(立命館大学、北海道教育大学、信州大学、三重大学)
● 公立図書館	● 美術館
● 博士課程後期課程進学 など	● 出版社 など

修了生の紹介

筑紫女学国大学
須藤 圭さん
2011年度博士課程後期課程修了
(学位論文)
狭衣物語受容史の研究

学位論文をもとに刊行の著書
『狭衣物語 受容の研究』
(新典社、2013年)により
第3回池田亀鑑賞受賞

「文学は役にたたない」と言われ続けています。それにあらがってか、文学の復権とか、逆襲とか、そういった過激なコトバもみられるようになってきました。私が本学文学研究科へ入学を希望したのは、こうした状況に抵抗しようとしたのではなく、ただ、純粋に文学を研究することが魅力的だったからです。

進学した私を待っていたのは、たくさんの先生たちでした。本学文学研究科には、上代・中古・中世・近世・近現代文学、さらには、漢文学、日本語学という多様な専門の先生が勢揃いし、指導してくれる環境があります。ここでの研究生活は、文学に対する考え方を大きく広げ、文学研究の意義を問いなおす機会に満ちあふれています。例えば、江戸時代に書かれた源氏物語の梗概書に取り組んでいたとき、「そもそも、源氏物語じたいが読めていない」から「江戸の思想史の理解は、海外との関係も視野にいれるべきだ」まで指摘され、途方にくれるいっぽうで、物事を深く、俯瞰的にとらえることが大切なのだ、と自覚したことを覚えています。そのときに手を差し伸べてくれた同期や先輩がいたことも、忘れられません。

さて、冒頭の問題に戻りますが、文学は、私たちにとって、あるいは社会にとって、役にたつのでしょうか？ こんな疑問はバカらしい、と切り捨てることは簡単ですが、常に考え続けていくべき問題だと思います。文学研究科での学びは、そうした疑問に答えを与えてくれるはずです。

相国寺承天閣美術館学芸員
本多 潤子さん
2012年度博士課程後期課程修了
(学位論文)
釈教歌仙の成立と展開

日本文学専修在籍時に、最も力を入れていたのが、歌仙絵の調査です。様々な三十六歌仙を所蔵する機関を訪ね、近世期に書写され、あるいは出版された資料を直接確認していきました。また、寺社や博物館・美術館を多く拝観し、そのなかで新たな資料に出会うことも多々ありました。特に、京都を拠点とすることで得られた収穫はとても大きいものでした。

以上のような学外での活動の原動力となったのは、言うまでもなく、大学院における学びです。演習形式の講義を中心に受講し、そのなかで資料調査の手法を学び、分析する力を養えました。先生方のご指導、院生間での活発な意見交換がなければ、資料調査も、それをもととした博士論文を書き上げることも、出来なかったと思います。

さらに、資料を拝見する機会が増えるにつれ、それらが数百年の間に様々な人々の手を経て現存するのだということに、深い畏敬の念を抱くようになりました。そのため、資料そのものに携わる仕事がしたいと考えるようになりました。現在はその思いが叶い、美術館で仕事をしております。寺院に伝来した資料の保存及び展示公開、そして研究調査をする職場に身を置くことで、自身の研究は、個々の作品を次代に伝える営みの一環なのだという目的意識がより明確になりました。

これから大学院で学ばれる皆様も、ご研究を深めていくなかで感じた思いを大切にして、充実した研究生活を送られることを願っております。

三重大学教育学部専任講師
和田 崇さん
2013年度博士課程後期課程修了
(学位論文)
徳永直の創作と理論
—プロレタリア文学における労働者作家の大衆性—

日本文学専修では専門的な文学研究の方法を学ぶことができました。とりわけ一次資料や複数の資料を見つけるためには足でかせぐことが重要だということを実感しました。学部生の頃の私はとても内向的な性格で、手近で必要な資料だけを集め、あとは引きこもるという研究スタイルでしたが、大学院に進学して本を読み込むだけでは文学研究はできないことに気づきました。それから、指導教授の支援や同級生の積極性に刺激され、南は九州から北は北海道まで資料調査に出かけたり、呼ばれてもない研究会にもぐり込んで人脈を広げたりと、意欲的に研究活動を展開するようになりました。

こうして大学院で本当の文学研究とは何かに気づき、閉じたドアを開放してきたからこそ、研究や教育を職業にできた今の自分があると思っています。文学研究はもちろんテキストの読み込みが第一ですが、それだけにとどまらぬ発展的な研究法を文学研究科で学んでください。ときには、書を捨てて町へ出ることも必要です。

中国文学・思想専修

Chinese Literature

古典を中心に各分野の専門家を擁し、
また本学の豊富な文献が研究を支援します。

教学概要

中国文学・思想専修は、長い歴史と伝統を背景として、これまでに多くのすぐれた研究者を輩出してきました。文化勲章受章者の白川静名誉教授が進められた甲骨・金文学研究の資料を始めとして、古典詩文・白話文学・近現代文学および思想関連の文献を豊富に収蔵し、さまざまな研究を可能にする環境が整っています。悠久の歴史の中ではぐくまれ、東アジアの文化に大きな影響力をもつ中国の文学や思想に関する高い識見を養い、そこに存在する興味深い問題について清新な研究を展開します。専修の院生や修了生の機関誌として「學林」があり、研究成果を世に問うことができます。



教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野 ・ 研 究 の 特 色
芳村 弘道 教授	唐代の詩人（白居易など）の生涯と文学についての研究、中国・日本の漢籍文献学および書籍を通しての日中文化交流に関する研究を行っています。
萩原 正樹 教授	詞の形態および文学性に関する研究、詞譜に関する研究と明治大正期の詞学に関する研究（特に森川竹礫の詞学を中心として）を行っています。
石井 真美子 教授	中国古代兵書の研究、主に銀雀山漢墓竹簡をはじめとする出土文献に見える先秦～漢代の兵書および軍事思想について研究を行っています。

特色ある授業・活動

博士課程前期課程の「特別研究」では、前期課程および後期課程の院生と教員が一堂に会して、前期課程院生の修士論文の発表を中心に、活発な議論を展開しています。また院生は、本専修の研究会組織である中国藝文研究会に所属し、教員や修了生とともに研究会で

発表をしたり、合評会で討論を行うなど積極的に参加し、研究会のさまざまな行事を通して、在学生と修了生、教員との交流も盛んに行っています。ほとんどの院生はTA（指導補助）として登録され、学部学生

修了生の主な就職先・就職状況

大学教員のほか、中学・高校の教員、塾講師など研究教育関係への就職が多いですが、その他公務員や一般企業へ就職する修了生もいます。

主な就職先（順不同）

●立命館大学 ●高知大学 ●福島大学 ●小樽商科大学 ●広島文教女子大学
●就実大学 ●上海師範大学 ●大阪府教員 ●京都府教員 ●京都市教員
●福島県教員 ●京都外大西高等学校 ●花園中学高等学校 ●京都女子中学校・高等学校
●河合塾 ●トライグループ ●東海プロセスサービス志門塾 など



修了生の紹介

国立大学法人
小樽商科大学言語センター教授

嘉瀬 達男さん

1996年度博士課程後期課程単位
取得退学

〈修士論文題目〉

楊子法言の章群構造について

中国文学・思想専修で学んだ思い出

常に授業の準備とアルバイト（高校の非常勤講師）、そして研究会の仕事に追われていました。時間をやりくりするのに苦労しましたが、この時期のおかげでやりくり上手になれ、今も助かっています。研究会では、先生方や修了生・在学生が中心となり、白川静先生の著作集や字書三部作の編集、恩師の論集編集のお手伝いをしたのが良い経験となりました。ただの手伝いですが、こうした作業を通して先生方の研究を学び、自分の研究方法を作り上げることができたと思っています。

現在の研究や仕事について

修士課程以来、前漢末の楊雄という人物について研究を続けています。文学・思想・言語学にわたる成果をのこした人物なので、この三分野のいずれも学べる立命館は最適な環境でした。また、中国文献学に興味をもったのも大学院からです。仕事は主に中国語の授業を担当しています。最近は留学や日中交流関連の仕事も多いです。

中国文学・思想専修を志す人へのメッセージ

中国語や中国事情の授業をし、現代の中国を考える際に実感するのは、歴史を知ることの重要性です。そして古典を学ぶことが、その基礎となることです。中国学は歴史のある学問分野ですから、最初は取り付きにくいですが、やればやるほど味わいが深まり、やめられなくなります。生涯を賭ける価値は十分あると思います。



京都女子中学校・高等学校教諭

森田 ゆかりさん

1990年度博士課程前期課程修了

〈修士論文題目〉

李白と佛教

中国文学・思想専修で学んだ思い出

白川静先生が、いわゆる「字書三部作」を次々出版された時期に院生となり、研究室はその関係でも大忙しで、すごい活気を感じました。学部ごろと比べものにならない、深い授業内容にたじろぎましたが、緊張感が心地よく、自分の学問の未熟さを恥じつつも、その場にいることが一つの勉強でした。とはいえ、研究に対する厳しさとともに家庭的なあたたかさがあり、これが伝統なのか？と居心地よく過ごしました。旧漢字を駆使する修士論文には、比喩でなく泣きましたが、その涙の中にも常に指導への安心感がありました。

現在の研究や仕事について

院生時代から非常勤講師として勤務した中高一貫校で、国語科の専任教員をしています。前期課程修了だけの身で恐縮ですが、2年間どっぷり浸った中国文学三昧の日々は宝物です。教材力や専門性もさることながら、院で学んだ、「深く読み込む」姿勢で、漢文はもちろん、現代文・古文であっても退屈させない、考えることを楽しむ授業が意識できるようになりました。学部だけでは、私にはそこまでの視野は開けなかったと思います。

中国文学・思想専修を志す人へのメッセージ

スピードや効率が最優先される現代ですが、不易の奥深い世界、心の根のようなものもまた、私たちは求めているのではないのでしょうか。去にし世の異国の一文字一文字に、古人の心を読み取る作業は、国際社会といわれる現代人の心にも実は通じているのだと思わずにはいられません。「学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや。朋有り遠方より来る、亦樂しからずや。」朋は時の彼方からもやって来てくれます。



国立大学法人福島大学
人間発達文化学類教授

澁澤 尚さん

1997年度博士課程後期課程修了

〈博士論文題目〉

中国古代神話研究
—「昆侖」文化と古代擬態語の
関係において—

中国文学・思想専修で学んだ思い出

発表資料の作成や、論文完成にむけての研究といった、学問と真摯に向きあう貴重な時間を過ごすことができました。漢文のあまりの奥深さに、時には圧倒され立ちつくすこともありましたが、充実した文献に囲まれ、諸先生や先輩方から懇切な指導や助言を得られるという好環境のなかで有意義な院生生活ができました。また、学部生にアドバイスする機会に恵まれ、教え伝えることの大切さや難しさ

を学ぶ経験でもできました。もちろん、宴席における先生方との楽しい談話のひとつときも良い思い出です。

現在の研究や仕事について

現在は、大学・大学院において漢字や漢文学に関する講義を担当しています。受講生の多くは、小中学校や高校の教員、また公務員を目指しています。漢文は古典教育の一環として重視されつつありますから、ゼミ生の教員採用試験合格率はたいへん高くなっています。自身の研究分野は、老荘思想や神話、また本草学です。漢詩文に登場する植物を詳しく分析することにより、中国思想や文学のあらたな解釈が可能になると考えています。

中国文学・思想専修を志す人へのメッセージ

文学や思想は、喻えてみれば「ぬか床」のようなものだと思います。漬かった方の野菜と違い、それ自体は食べられませんが、床の状態いかんで実食部分が美味くも不味くもなります。長い風雪を耐え抜いてきた強靱な古典である漢文は、決して虚学ではありません。実学を、人間をおきざりにしない真の実学たらしめるもの、その一つが漢文だと思っています。伝統ある立命館の大学院で漢文を追究する意義は、単なる知識・教養を得ること以上にあると信じています。

英米文学専修

English and American Literature

英米を中心とする英語文学・文化の研究を通して、
高度な英語力、分析力、表現力を養う。

教学概要

英米文学専修では、より高度な英語力と論理的な思考力を備えた修了生を送り出すべく、徹底した少人数制で指導しています。授業ではとくに読む力を養うことと作品について議論することで理解を深めることに重点をおいています。その成果は、修了後の進路にもあらわれており、留学や研究職はもちろんのこと、教職や公務員・企業など多様です。在学中には本学の複数の海外協定校との交換留学もあり、可能性は大きく開かれています。教員には、イギリス文学、アメリカ文学をはじめとする英語圏文学の専門家をそろえ、ジャンルも幅広くカバーして、学生の多様な研究テーマに対応しています。



教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野 ・ 研 究 の 特 色
金山 亮太 教授	近現代英文学、とくにヴィクトリア朝の小説と演劇を中心に、アングロ・サクソン人の民族的アイデンティティの変容について。『ディケンズ鑑賞大事典』（共著、南雲堂）や『イギリス文化史』（共著、昭和堂）。
竹村 はるみ 教授	イギリス文学、とくに詩や演劇を中心とする近代初期文学および同時代の文化史。『ゴルディオスの絆―結婚のディスコースとイギリス・ルネサンス演劇』（共著、松柏社）や『シェイクスピアと演劇文化』（共著、研究社）。
中川 優子 教授	アメリカ文学、とくにヘンリー・ジェイムズを中心とする19世紀後半から20世紀はじめの小説や女性文学。『語り明かすアメリカ古典文学12』（共著、南雲堂）。
吉田 恭子 教授	戦後のアメリカ小説および現代英語小説。 創作科の歴史とその文学的影響。『現代作家ガイド6 カート・ヴォネガット』（共著、彩流社）。
Nathaniel Preston 教授	My research concerns how religious sensibilities--both "traditional" and "alternative"--influence works of literature. Writers I have studied recently in this regard include the novelists W.E.B. Du Bois and Jhumpa Lahiri, as well as the poets James Merrill and Walt Whitman. "Both Rooms Are Waiting": Heroic Openness in James Merrill's The Changing Light at Sandover." <i>Ritsumeikan Bungaku</i> 634; "Pir Learning: Boundaries and the Unbounded in Jhumpa Lahiri's Fiction." <i>AALA Journal</i> 15.
川口 能久 特別任用教授	イギリス文学、とくにE.M.フォースターやジェイン・オースティンを中心とするイギリス小説。『E.M.フォースターの小説』（単著、英宝社）や『個人と社会の相克 ―― ジェイン・オースティンの小説』（単著、南雲堂）。

特色ある授業・活動

徹底した少人数クラスでの親身な指導と学生の可能性を最大限に生かす制度的バックアップ、この二つが英米文学専修の大きな特色です。

授業は、文学テキスト研究と学生による研究発表や討論を主とし、修士論文・博士論文の作成にあたっては、論文の書式、内容、文献、文章（英語・日本語）等に関して丁寧な指導が行われます。また、本専修

所属の教員、在学生、修了生等によって構成される立命館英米文学会では、年次大会を開催し、学会誌を発行しています。学会誌には大学院生の論文も掲載され、研究成果の積極的な発信を奨励しています。このような学会活動を通して、学生は教員や修了生との親睦や結びつきを深め、個々の研究活動の充実を図ることができます。



修了生の主な就職先・就職状況

- 大学教員（立命館大学、同志社女子大学、環太平洋大学、東京電機大学、海技大学校） ●高校英語教員 ●大学職員 ●公務員
- 一般企業（ダイキン、臨川書店、極東書店、ホテルグランヴィア大阪、航空会社） など

教員からのメッセージ

英米文学専修は、英米を中心とする英語圏で書かれた英語文学を研究対象とする専修です。文学研究とは、実証的な分析に基づく独創的な読みを提示することによって作品に新たな生命を吹き込む、すぐれて創造的な営為です。言語表現の可能性に関する明敏な感性を養い、歴史的・文化的な知識を踏まえながら、作品テキストを緻密に分析

する能力が問われます。本専修での学びによって、様々な時代やジャンルの作品はもちろん、近年の活発な批評動向を反映する多種多様な文学批評書を研究することにより、専門的な英語文献の読解力を実践的に身につけることができます。真摯かつ積極的な姿勢で研究に取り組む意欲のある学生の入学を期待しています。

修了生の紹介

私立大学教員 〈修士論文題目〉 "Oscar Wilde's Expression of Soul: from 'The Fisherman and His Soul' to <i>The Picture of Dorian Gray</i> " 〈博士論文題目〉 "The Representation of 'Music' in Oscar Wilde's Texts"	英米文学専修に進んだきっかけ 学部3年生時に参加した大学院の授業がきっかけで進学を決意しました。少人数ならではの内容の濃さに刺激を受け、学習のモチベーションがとても上がりました。実践的な英語運用能力が身につくカリキュラムと、一人ひとりをしっかりと見てくださる指導体制にも魅力を感じ、進学しました。 英米文学専修での学び 現在の英語圏文化の源泉ともいえるイギリスやアメリカの文学をより専門的に思索し、視野を広げることができます。最終的な目標は修士論文の完成ですが、そこに至るまでのプロセスを支えてくれるのが日々の授業です。なかでも、英語で書かれた文献の読み方や、英語論文の書き方については、とても丁寧なご指導をいただけます。海外留学や院生有志の勉強会など、各々の希望に応じた学びの場が多く用意されています。 英米文学専修を志す人へのメッセージ 英語圏の詩、小説、演劇から、ポピュラーカルチャーまで、先生方はさまざまな学生の関心に応じてくださいます。英語運用能力向上はもちろんのこと、歴史、文化、宗教などの各分野においても知見を広げることができる専修です。切磋琢磨できる仲間や先生方に支えられ、きっと自分の未知なる可能性に気づくことができます。院生棟や図書館をはじめ、私学ならではの恵まれた研究環境もぜひ体感していただきたいです。
出版社勤務 〈修士論文題目〉 室内装飾の意味するもの― <i>The Age of Innocence</i> ―における書齋と客間―	現在の仕事について 学術図書を扱う出版社の編集部に所属しています。企画から始まり、校正、装丁のデザインなど、著者の先生とコミュニケーションをとりながら、本の完成までに要する様々な作業、手配を行っています。私自身はまだ自分の企画を実現するに至っていませんが、いずれは自らの発案で読者に喜ばれる本を製作したいと考えています。 英米文学専修での学び 専修の授業では一言も話さずに終わるものはほとんどありません。こうした発表や発言の機会の多い日々の授業や、レポートや修士論文の作成などを通して、英語力とともに、物事の問題点を捉える力、論理的に考え、言葉にする力が鍛えられました。仕事においても、会議や著者との打ち合わせなど、自身の意見を求められる場面は多いので、大学院での経験が役立っていると感じます。また、大学院で知ること・学ぶことの面白さを実感したことが今の仕事にも繋がっています。 英米文学専修を志す人へのメッセージ 大学院時代を振り返ると、毎日課題や研究に頭を悩ませてはいましたが、自分なりに学問に向き合い、打ち込んだ、とても充実した日々であったと感じます。先生方は学生一人ひとりに温かく丁寧に指導くださいますので、不安に思うことなく、チャレンジしていただければ、きっと自分を成長させるたくさんの機会に恵まれることと思います。

日本史学専修

Japanese History

古代～現代の専門家が、
伝統ある「立命史学」に立脚した新たな歴史学を構築します。

教学概要

古代から現代にいたるすべての時代に対応して、1名以上の教員が配置され、文化史や思想史などの特殊な分野を専門とする教員もいるので、院生の幅広い学びの希望に対応できます。古くから「立命史学」とよばれる歴史と伝統をもち、学界で活躍する研究者を多数輩出してきました。具体的には、それぞれ1名の指導教員のもとに、修士論文、博士論文の完成をめざします。その過程では、各指導教員の授業内で研究報告を行い、全教員と全院生が出席する特別研究においてさらに研究報告を行います。留学生を含む院生の数も非常に多く、さまざまな学問的刺激のもとに、研究を進めることができます。



教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
小関 素明 教授	 日本近現代政治思想史	近代官僚制・政党政治史論・立憲制・二大政党制などを包括した公権力・主権論が主たるテーマです。同時に、歴史学の歩みを批判的に再検証する史学史にも興味をもっています。
桂島 宣弘 教授	 日本近世思想史	明清・朝鮮王朝思想史を射程に入れた東アジア思想史の解明に努め、近代学術の思想史を帝国・植民地空間の中で検証する作業を行っています。
田中 聡 教授	 日本古代史、日本史学史、京都地域資料論	3～9世紀の日本列島周辺地域における夷狄の実態と、日本史における「自我認識」の変容過程について追究しています。また京都の地域資料を掘り起こし、住民の歴史意識を考えています。
東島 誠 教授	 歴史学・思想史	日本中世史を出発点としながらも、古代から現代まで縦横に論じることが特色です。人と人とのつながりをテーマに、政治学・社会学・哲学の垣根を越えて研究しています。
本郷 真紹 教授	 日本古代史 宗教史	7～9世紀の日本古代律令国家の宗教政策、地域における仏教と神祇信仰との交渉過程、古代宗教制度の史的意義、古代王権の宗教政策などの研究をしています。
美川 圭 教授	 日本中世政治史	院政論を中心に、それと関わる中世都市論、中世文化論、対外関係論などにも研究を広げてきました。近年は、時代をこえた会議論などの政治的な意思決定過程の研究に着手しています。
山崎 有恒 教授	 日本近代政治史	「公議」というキーワードを軸に幕末維新期の研究をしてきました。近年は治水・競馬などの視点から、日本政治のありかたを俯瞰する研究に着手しています。とくに植民地競馬史という新しい分野の研究を開拓中です。
大田 壮一郎 准教授	 日本中世史、宗教史	鎌倉～室町時代における武家政権と宗教の関係が主な研究課題です。最近では、中世仏教における宗派をめぐる問題や、中世後期の南都についても取り組んでいます。

特色ある授業・活動

全教員と院生が参加して実施される「特別研究」における研究報告と討論は、さまざまな批判や意見を受け、自身では気づけなかった研究視角や方法を学べるとともに、広い視野から自分の研究テーマの意義を考える貴重な機会となります。授業以外にも、他大学、とくに京都大学、大阪大学、神戸大学、京都府立大学、大阪市立大学などの研究室、大学院

生との日常的な学問的交流もさかんです。日本史研究会などの在野の学会への参加も促しており、京都を中心とした関西日本史学界の中心的な役割をはたしています。学内外は無論、国外のさまざまなプロジェクト研究に参加することを勧めており、そこの異分野の教員・院生・学生との交流や共同研究という経験も、その後の仕事の上で役立ちます。

修了生の主な就職先・就職状況

博士課程前期課程修了者では、中高教員、公務員一般職、一般企業、本学・他大学博士課程後期課程進学などで、かなり幅広い就職、進学先があります。博士課程後期課程修了者は、主に大学教員や博物館学芸員、各種

研究所が就職先となります。多くが在学中および修了後、日本学術振興会特別研究員となってきました。また、私立大学としては、群を抜いて出身者が全国の大学教員になってきた実績と伝統はなによりの大きな強みです。

修了生の紹介

佛敎大学歴史学部
准教授

佐古 愛己さん

1998年度博士課程前期課程修了
2002年度博士課程後期課程修了

〈博士論文題目〉

平安中・後期～鎌倉期における
叙位制度の研究

私が大学院進学を決意した契機は、卒業論文の執筆を進めるなかで、卒論のテーマとは別に疑問や関心が生まれ、もう少し研究を続けたいと考えようになったことにあります。そのテーマが今の研究課題につながっています。

大学院での一番の思い出は、日本史学の研究に不可欠な史料の扱い方について深く学び、少しずつ史料を読み解き、まだ解明されていない歴史像を自分なりに考え、明らかにしていく楽しさに出会えたことにあると思います。

一方で、自分の研究対象とする時代・分野のみならず、幅広い内容に関わる授業に参加することで、さまざまな知識を吸収できた点も大学院での学びのよいところではないでしょうか。

また、学部の時以上に先生や院生同士の人間関係が緊密となるなかで、研究を進めることができます。特に全教員と院生が参加して実施される「特別研究」における研究報告と討論では、忌憚のない批判や意見を受け、自身では気づかない研究視角や方法があることを学ぶとともに、広い視野から自分の研究テーマの意義を考える貴重な機会になったと思います。

さらに、授業以外にも学内外の研究会・学会やさまざまなプロジェクト研究に参加する機会が増えます。私も内裏清涼殿のCG復元という文理融合型のプロジェクトに参加した経験があります。異分野の教員・院生・学生との交流や共同研究という経験も、その後の仕事の上で役立っています。

大学院時代はいろいろと挫折を経験して、将来への不安や焦りに見舞われる時期でもあると思いますが、自分が本当に明らかにしたい研究テーマをみつめて諦めずに頑張っていたいただきたいと思います。

和多田印刷株式会社勤務

花田 友紀子さん

(旧姓：牟田)

2007年度博士課程前期課程修了

〈修士論文題目〉

近世期における

水平的文化交流の様相

—京都本草学の物産会を素材に—

修士論文では、学部の頃から関心をもっていた本草学をめぐる修学環境や、本草学を学ぶ人びとが全国から集まる物産会という「場」を素材に、近世中・後期における学問を通じた文化交流の具体的様相を研究しました。

本草学関連の史料はほとんどが未刊行だったので、授業の合間や長期休暇を利用して各地の文庫へ史料調査に行ったことが大学院時代の一番の思い出です。くずし字で書かれた原本の読解は時間がかかり大変でしたが、今までの研究で利用されたことがない史料は読み進めた分だけ新しい発見があり、それらを積み重ねて修士論文を完成させた時は、何物にも代えがたい達成感でいっぱいでした。

また、専門とする時代や分野を超えた院生同士の交流によって、視野を広げることもできました。特に、私が所属した近世史ゼミには留学生も多く、ともに学ぶなかで多様な価値観に触れ、今まで気づかなかった視角から物事を捉えられるようにもなりました。

現在は京都の印刷会社で営業事務をしています。仕事内容は研究とは直接関係ありませんが、仕事を円滑に進める上で、「課題を見つけ、様々な視点から考え、解決する」という大学院時代の経験が大きな財産になっています。

大学院は自分の問題関心と向き合い、研究に没頭できたかけがえのない時間でした。これから大学院に進学される方には、自分の行動次第で学問に対する様々なアプローチが可能な時間を存分に楽しんでほしいと思います。

立命館大学

文学部日本史研究学域助教

奈良 勝司さん

2001年度博士課程前期課程修了
2004年度博士課程後期課程、単位取得退学

〈修士論文題目〉

文久～慶応期における

徳川将軍家内部の路線対立

—「違勅問題」への対応を軸に—

〈博士論文題目〉

信義と征夷のあいだ

—幕末の徳川政権と明治維新における「世界認識体系」の変遷—

日本史学専修で学んだ思い出

学部生の時に先輩の院生に「暇で楽しそうでいいですね」と言ったら、すごく怒られたことがあります。実際、院に入ると必要単位数は減りますが、個々の授業に必要な労力はむしろ増えました(先輩の怒りは正当でした)。このような環境ではスケジュール管理が大事になります。そこで、毎日7時半に起きる、1日11時間は勉強するなど、決まりを作って自分を秩序づけることにしました。そして、徹底的に深い学習をすることを心掛けました。毎日大変でしたが、誰も知らない好史料を見つけた時や複雑な時代像が1つの線として自分の中でつながった時などは、大きな喜びを感じることができました。その一方で、専門領域外の先生の授業を取ったり、国際交流プログラムにも参加するなど、自覚的に今までの常識や世界観を揺さぶったりもしました。

現在の仕事との関係

10年以上研究を続けてきた今でも、院生時代は特別だったと思います。勉強に集中できる時期に気力と体力を総動員して得た知識や考え方は、その後の自分の基礎を作ったと思いますし、苦しみながらも全力を尽くした経験は、大きな自信にもなりました。

入学予定者や在籍者へのメッセージ

楽しいことを誰よりも真剣に。大学院の勉強に楽なこととはなく、何をやっても100%を出せばしんどいですが、大事なのはしんどくてもこれなら我慢できるという目標や対象を見つけること、そのための嗅覚を磨くことだと思います。

主要業績：『明治維新と世界認識体系』(有志舎、2010、単著)、『講座 明治維新2 幕末政治と社会変動』(有志舎、2011、共著)、『近代社会の生成に「民衆」をどう位置づけるのか』(『日本史研究』588、2011)、『明治維新における「主権」と「国民』』(『日本文学研究』38、2013)、『近代日本形成期における意思決定の位相と「公議』』(『日本史研究』618、2014)、他

東洋史学専修

East Asian History

充実したスタッフの下で、
前近代中国についてさまざまな研究ができます。

教学概要

東洋史学専修には前近代の中国の歴史を研究するにふさわしい環境が整っています。現在、本専修には特別任用教授も含め四人の専任教員が在籍し、いずれも中国をその主要な研究対象としています。その専門とする時代は古代から近現代までを間断なく覆い、研究分野も法律制度から社会文化にいたるあらゆる範囲に及んでいます。本専修では、このような他大学ではあまり例を見ない充実したスタッフの下、中国史研究においては時代や分野を問わず質の高い研究指導を受けることができます。

なお、文学研究科の改編に伴い、近現代東アジアの歴史研究は2014年度以降、現代東アジア言語・文化専修が担当することになりました。



教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
井上 充幸 教授	中国近世文化・社会史	政府の公文書から個人の日記に至るまで様々な文献を用いて、明清時代の「世相」を幅広く研究しています。また、シルクロードの水環境問題の歴史も研究しています。
鷹取 祐司 教授	中国古代史	主に秦簡・漢簡などの出土文字資料を利用して、秦漢時代の刑罰制度や文書行政といった法制史の研究をしています。
松本 保宣 教授	中国中世史	唐代の政治制度・都城史を専門としています。皇帝の居住する宮城の構造と官僚制度・政治史の関連を考察しています。

特色ある授業・活動

東洋史学専修における教学の特徴としては何より特別研究が挙げられます。この授業は、本専修所属の全ての大学院生と教員が一堂に会するもので、大学院生の研究発表に対して、大学院生同士の質疑応答を行った後、教員一人一人が史料解釈の誤りや論証の不備などを指摘したり今後の研究についての具体的助言をしたりします。こ

の授業において、様々な時代・分野を専門とする教員から指導を受けることで、大学院生の研究の視野を広げることができます。

また、大学院生を中心に運営する立命館東洋史学会・立命館史学会の大会・例会において大学院生による研究発表が盛んに行われていますし、学部生も加えた読書会も開催されています。

修了生の主な就職先・就職状況

本専修修了者の進路は教員が比較的多いです。東洋史学という少し地味な印象の専修のため民間企業への就職は不利と思われがちですが、就職状況は決して悪くなく、専門とは直接関連しない分野の企業にも幅広く就職しています。人文学において一つの分野を深く学ぶ経験は、色々な職種やその後の人生に役立ちます。

主な就職先（順不同）
●公立私立中学高校 ●市役所
●(株)日立製作所 ●ワールドビジネスセンター
●比果産業株式会社 など

修了生の紹介

公益財団法人明治村勤務 役重 文範さん 2008年度博士課程前期課程修了	皆様は大学院に対してどのようなイメージをお持ちですか。大学生の時よりも高度な知識を求められ難解な講義が行われる場という思いがあるかもしれません。また、希望企業入社までの時間稼ぎの場などという考えを持っている方もいるかもしれません。しかし、実際は大学生の時の講義を延長したような授業であり、それほど難しく構える必要はありませんし、就職までの待機場所というほどでもない時間を過ごす場でもありません。 私が大学院で勉強したことは東洋史学でしたが、日々講義を楽しんでおり、就職に必要な知識を身につつけ磨きをかける次のステップと考え勉強しておりました。卒業までの間は、自ら学び修得したものもあれば、講義等で自然と身についたものもあります。 私が皆様に知ってお願いしたいのは、特に進学したことで自然と身についたものです。大学生の時から少なからず行っていた研究ですが、さらにこれを発展・追求したものが大学院では求められました。これは就職後に意欲的に仕事を行っていくことにもつながりました。また、講義ではしばしば発表の場が設けられます。調べたことを発表し、質問を受けて回答することは、就職後の関係者との打ち合わせや会議でのやり取りにも似ており、自らが受け持つ仕事でのやり取りの自信にもつながります。 大学院での経験は、現在の仕事にも様々な面で活かされますので、進学される方はぜひ日々の生活を大切にして過ごして下さい。
京都市内 私立中学校・高等学校勤務 M.Oさん 2010年度博士課程前期課程修了	現在、社会科の教員として邁進している私が大学院進学を志望したのは、甲骨文の研究を深める為でした。当時は夢だった「歴史学者」になるために無心に突き進んでいました。しかし、大学院の研究授業を含め、教職の授業など幅広い分野の授業を受けることによって、自分は果たして研究者としてやっていけるのか、他にもこんな自分に出来ることは無いのかと思悩むようになりました。院生時に二度目の実習に行ったこと、院の先輩の紹介で（京都市主催の体験型）キャンプに行ったことで自分の価値観に変化が生じ始めました。そして、立命館大学教職支援センターのオーディリーの全体リーダーを任されたことから、自分の目標が明確になっていったのです。 私には東洋史の教授に言われ、今でも大事にしている言葉があります。「自分の足を最大限に活用しろ」です。膨大なデータと情報処理が必要な社会科は、甲骨文で培った情報収集能力、学生時代や暇を見つけて旅行した場所の記録を行動力と併せて、生徒に「机上の学問」「ただ暗記だけの科目」と思わせない努力を日々重ねています。 私はまだいえる立場ではありませんが、大切にしてほしいことがあります。それは、授業や発表で相手を納得させるプレゼンをするということです。これは教員も学生も同じで、相手にわかりやすく伝えなければなりません。難しいことをそのまま言ったり、教科書のまま言うのは簡単です。そうではなく、「足」を使って調べた「データ」をわかりやすく活用してください。そしてどんなに辛くても最後にもらえる「ありがとう」（＝研究成果）のためにどんな茨の道でも揺るがない志をもって突き進んでください。
(株)滋賀富士通ソフトウェア勤務 吉武 浩司さん 2010年度博士課程前期課程修了	私が東洋史学専修博士課程前期課程に在籍したのは2009年度～2010年度の2年間で、大学入学前から前漢に興味があり、卒業論文執筆後ももう少し研究を続けてみようと思い、東洋史学専修博士課程前期課程に進学しました。 東洋史学専修での研究の流れは資料を集め、先行研究の不足を課題として発見・設定することから始まります。そして設定した課題について独自の見解を導き出し修士論文を完成させますが、その過程を中間報告として特別研究という授業で発表します。東洋史学専修のカリキュラムには、講義形式のもの（東洋史特殊問題）とゼミ形式で行われる先述特別研究があります。東洋史特殊問題では担当の先生によって形式が異なり、私が受講したものでは漢文資料、英語論文、墓誌・碑文をそれぞれ輪読していました。 東洋史学専修の在籍者は研究分野が多岐にわたります。そのため、特別研究では学生間の専門的な応答は難しいですが、文章や発表方法について予備知識がなくても理解できるものだったか、どうすれば理解を得られたかという意見交換は盛んだったと感じます。専門外の人にも理解できる発表を意識することにつながりました。 現在はIT関連の職に就いていますが、専攻の運営として当時の専攻HP制作に携わった経験や、甲骨文文字フォント制作の助手経験が現職に就くきっかけとなりました。また、東洋史学専修在籍時に漢代についての興味から陝西省西安市や湖南省長沙市の博物館めぐりをした経験などは、些細なことではありますが業務として中国の企業と仕事をした際、先方と打ち解ける材料になりました。在籍中に語学に力を入れるのであれば仕事に役立つ機会も多くなると思います。東洋史学専修には留学の機会もあるので、留学で語学も伸ばすといった活用が可能でしょう。なにより問題を明確にし、解決に向けて突き詰めるという研究の基本姿勢が、多くの職業に通じることだと思いますが現在の業務にも活かしています。そして現在でも研究書を購入したり、研究会に出席したりと趣味として息抜きになっています。 東洋史学専修では、博士課程前期課程の2年間は研究だけで終わるわけではありません。専攻や研究会の運営をはじめ、様々な経験をすることができます。博士課程前期課程を終えてからは研究を続ける道を選択することはもちろんですが、在籍中の経験から別の道を模索することも可能だと思います。是非東洋史学専修で自分の可能性を見つけ出してください。

西洋史学専修

European and American History

西欧からビザンツやロシアをも包括したグローバルな視野から、西洋史研究の最前線を紹介・検討します。

教学概要

研究に不可欠な方法論や史料論に関する技術や基本知識の習得、研究文献を読み解く語学力と思考力の鍛錬、論文の作成について丁寧に指導します。また、各学生の研究テーマの発展・深化を促進するために、個別指導と研究会形式での発表・討論を両軸にしており、研究分野を超えた教員・学生からのアドバイスを受けることができます。また、各教員が活動の場としている研究会（関西中世史研究会・ビザンツ学会・ドイツ近現代史研究会・ロシア史研究会など）に積極的に参加を促し、研究の現場での研究力の養成に努めています。



教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
小田内 隆 教授	西洋中世史、 キリスト教史	中世ヨーロッパにおけるキリスト教のイデオロギー的な役割、とくに中世異端史の諸問題、異端審問と権力などを研究。これと関連して教会の民衆教化の歴史や歴史史料に関するテキスト論にも関心を寄せています。
高橋 秀寿 教授	ドイツ現代史、 現代文化論	空前絶後のジェノサイドであるホロコーストという出来事を東西ドイツ国家がいかに記憶していったのか。この研究課題を時間と空間の変容とそれに伴う国民の生成過程との関連で解明することをめざしています。
小林 功 教授	ビザンツ史、 地中海文明史	古代末期～中世前期の地中海世界や、7～9世紀のビザンツ帝国の政治経済的变化に関する研究を行っています。最近は特に7世紀中盤のビザンツ帝国をめぐる状況の分析を進めています。
森永 貴子 教授	近世ユーラシア毛皮交易史、 シベリア商人史	専門は帝政ロシアの社会経済史です。18～19世紀のシベリア商人と露清貿易、とくに毛皮貿易と茶貿易を中心に研究してきました。ロシア・ヨーロッパ・太平洋をつなぐ貿易ルートや商人ネットワークに関心があります。

特色ある授業・活動

近年では、全国の主要な私大・国立大との研究交流の活発化を契機に、学外での学会・研究会活動なども積極的に促進しています。また、さまざまな研究プロジェクトへの参加を通じて、共同研究の経験をもつように努めています。とくに、関西の私立大学（同志社大学・関西

大学・関西学院大学）や国公立大学（京都大学・大阪大学・大阪市立大学）との間で若手研究者・院生主体の学会を年1回開催し、大学間の学的交流を深めています。

修了生の主な就職先・就職状況

博士課程前期課程修了者のなかには西洋史研究のなかで培った語学力と文献調査の訓練を生かして、洋書輸入書店（丸善、紀伊國屋など）に就職した人がいます。他に、中高教員、公務員、国公立大学職員、博士課程後期課程への進学、など。

博士課程後期課程修了者からはこれまで富山大学、神戸女学院大学、神戸大学、名城大学などに研究職に就いた人がいます。

修了生の紹介

丸善雄松堂株式会社勤務

N. J.さん

2005年度博士課程前期課程修了

〈修士論文題目〉

中世末期フィレンツェの兄弟会と政治：場としてのオルサンミケーレをめぐる

在籍中の学びや研究活動について

西洋史学専修在籍時の一番の思い出として、専修の全教員による指導があります。中世キリスト教史を専門とされる先生以外にも、古代から現代、ドイツ、アメリカ、ギリシャと多彩な先生方から、イタリア中世史という自分の専門や興味・関心に限らず、幅広く歴史学や関連する学術分野のテーマ、そしてそれぞれが抱えている問題についての指導を受け、蒙を啓かれました。アメリカ史やイギリス史という自分とは異なる専門を持つ先輩方や、他流試合として参加してきた関西イタリア史研究会などの各種研究会・学会でお会いしてきた他大学の先生や先輩方とは、現在も交流があり、多種多様な分野の資料や最新の研究動向について教えて頂いています。

西洋史学専修を志す人へのメッセージ

広く関心を持って全体を見ようとする意識、地域や言語を問わない資料の収集、調査と分析の基礎的な体力と他分野に対する関心の持ち方等、在籍時に培った貴重な技能や経験は、印刷本以前の写本・手稿やグーテンベルク以降の揺籃期本などの古書から電子書籍まで、そして歴史学・哲学・法学・芸術などの人文・社会科学を中心とした学術洋書を専門的に取り扱うという業務を行う上で、非常に役立っています。

丸善雄松堂株式会社勤務

M. T.さん

2008年度博士課程前期課程修了

〈修士論文題目〉

ローマ帝国における
キリスト教化の一側面
—キリスト教と帝国の接近に着目して—

在籍中の学びや研究活動について

西洋史学専修は、修士課程・博士課程に所属する人数が少ないため、教員・諸先輩との距離が近く、研究発表の機会に多く恵まれました。興味関心が近い人間と切磋琢磨し、議論の場をもてた事は、現在、社会人として仕事を行う上で、大きな財産となったと実感しています。幸運にも、その経験が功を奏し、丸善株式会社にて、学術・研究機関向け、図書販売を中心とした仕事に就く事ができました。

西洋史学専修を志す人へのメッセージ

19世紀の歴史家たちは、事実や資料の実存に依拠し、分析・叙述を行っていました。20世紀の歴史家たちは、思想・社会の変化の中で方法論を確立しなければならず、「事実」の説明に対して論理を持たなければならなくなりました。21世紀に生きる私たちは、これらの背景を踏まえつつ、多様な側面から、歴史の事象、その意味、その構造を説明することが求められています。本専修のOBとして、入学予定者の方々、現在在籍されている院生の方々が、本専修にて学び、現代社会に起こり得る事象についても、しっかりとした根拠をもって自らの意見を言える方になっていただければ幸いです。

日本学術振興会特別研究員

M. S.さん

2004年度博士課程後期課程修了

〈修士論文題目〉

ボリス・アテナイ住民の成員認識
—アストイ概念の分析を中心にして—

在籍中の学びや研究活動について

在学時、院生の数が少なかったこともあり、専門とする古代史以外のゼミでも頻繁に報告をする機会に恵まれました。専門外の時代・問題に取り組むのに苦労したことは間違いありませんが、そこで得られた知見は、自分の研究テーマやその意義を、より広い視野から見直すことにもつながりました。この経験は、現在、研究を続けるうえで大きな財産となっています。

西洋史学専修を志す人へのメッセージ

できる限り、「時代」「西洋史学」「歴史学」「人文学」「大学」といった殻の内側に閉じこもらないようにしてください。それらの外に目を向けることで、研究は広がりのある、実り多きものになると思います。またこうした研究を通じて、現代社会、そしてそれを大きく規定している西洋の知のあり方についても批判的に思考をめぐらしてほしいと思います。

文化動態学専修

Cultural Dynamics Studies

諸文化のダイナミズムに学際的にアプローチし、
ユニークな課題・方法で研究できます。

教学概要

文化動態学専修では、流動・変化し続ける様々な時代・地域・社会の文化を対象に、専門領域を横断する方法で研究を行います。既存の学問の枠組みにとらわれずに研究課題を設定し、各自がその具体的な研究課題に即した指導を受けることができます。教員は、比較文学、言語学、歴史学、社会思想史、美術史、美術批評、社会学、文化人類学といった多様な専門を有する研究者から成り、学生の課題に応じて共同で指導に当たります。研究対象の地理的範囲もヨーロッパ圏や南北アメリカから、日本や中国、南アジア、オセアニア圏に及びます。幅広い領域をカバーできる多数の専任教員により緊密な指導を行う体制が整っています。

教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野 ・ 研 究 の 特 色
上田 高弘 教授	近代美術の批評史的研究および現代美術の批評実践。とはいえ近年の研究は、歌劇（とくにモーツァルト後期の）や文学、果ては「身体と墓地」に関するものであったりと、おおいに守備範囲を拡張しています。
唐澤 靖彦 教授	グローバル軍事史の文脈に明治日本の要塞築城を位置づけること、並びに比較軍事史の視点から各地の要塞築城を考察することを専門にしています。また、中国史（明清～近現代）における身体性と内面の関わり、口承伝統と書字文化の交錯といった研究にも取り組んでいます。
崎山 政毅 教授	近現代ラテンアメリカ思想史・文化論および現代資本主義論。この間、前者では1920年代アヴァンギャルド表現運動分析・1960年代後半以降の武装革命闘争史を、後者では利子を生み資本形態をとった架空資本のグローバルな動態を研究中です
須藤 直人 教授	「南洋」の比較文学・文化。日本・英米・オセアニアの文学・文化テキストの分析を通して、帝国主義とエコロジーの関係、グローバルな世界像とローカルな場のイメージの関係を軸に、「南の島と海」の表象が孕む問題・可能性を考えています。
千川 哲生 准教授	フランス17世紀演劇が、古典文学や同時代のヨーロッパ演劇を手本とし、レトリックなど同時代の芸術、学問を参照しながら発展した過程を文献学的に解明することに関心を寄せています。
土肥 秀行 教授	イタリアの現代文学、詩。パゾリーニという詩人が、詩に用いる純粹言語を方言に見出したことに、文学の「本流」と「傍流」の一致点をみました。最近では日本の短詩形「ウタ」と「ハイカイ」が、「前衛」として現代イタリア詩の革新に果たした役割を探っています。その際、20世紀初頭のナボリの未来派らに例をもとめています。
中村 忠男 教授	文化人類学、神話学。ヒンドゥー教巡礼と南アジアにおける大衆的宗教画発展との相関関係、さらに、アンダマン諸島の歴史から見た「インド性」の形成などについて研究しています。
長澤 麻子 教授	専門はドイツ現代思想。ヴァルター・ベンヤミンの歴史認識や芸術論を研究しています。また現在はエッセイ形式と哲学の関係にも関心を持っています。モットーは「人間の精神は休むことができない。動きのないこと、すなわち、さらなる知覚への動きがないことは、精神にとって拷問にひとしい」（ライプニッツ）。
西林 孝浩 教授	仏教美術を中心とした東洋美術史。龍門石窟や敦煌莫高窟における造像主題や様式分析の他、漢代から南宋時代までの美術交流史に関心を持っています。中国美術における規範の形成やその揺らぎ等の問題について、シルクロードを通じたインド・中央アジア美術の伝播や、日本美術の展開も射程に入れ、作品に即し分析しています。
檜枝 陽一郎 教授	ゲルマン語学および文学、とくに中世オランダ語による動物説話『ライナールト物語』を研究、さらに中世低地ドイツ語また古フリジア語を専門的に研究しています。
宮本 直美 教授	音楽社会学・文化社会学。ヨーロッパ近代の音楽文化（コンサートやアマチュアの活動）を音楽の社会的な価値形成の観点から研究しています。また、宝塚歌劇のファンクラブについて組織論的に分析するとともに、西洋と日本の劇場文化を対象にしてレビューというジャンルの社会的意味の考察を行っています。

特色ある授業・活動

外国語の学術書や論文を読む授業が多く、精読・要約のみならず速読・多読の訓練も行い、外国語文献を自在に使いこなす技術の習得を目標としています。どの授業においてもテキストの読解に重点を置いており、文字テキストだけではなく、図像・映像・彫像等の非文字テキストを読み解いていく授業もあります。社会思想史・芸術の諸問題、心象地理・歴史とポストコロナリアル文化、歴史における身体性、等々のそれぞれにユニークなテーマのもと、古典的なものから最先端のものまで基礎的な文化・芸術理論を学び、それらを多様なテキストの解釈に応用しながら自由闊達な討論を行っています。



修了生の主な就職先・就職状況

修了生の主な進路は、各種一般企業、公務員、中高教員、大学教員、学芸員、博士課程後期課程進学となっており、就職先は多様な分野に渡っています。

主な就職先（順不同）
●臨川書店 ●アイル ●立命館 ●プランニングオフィス エスエムエス ●東芝 ●常陸大宮市役所 ●小泉成器 ●イーデーエム

修了生の紹介

C・Iさん
2007年度博士課程前期課程修了
〈修士論文題目〉
大津絵と民芸運動
―柳宗悦から片桐修三へ

大学院時代を振り返るとき、はじめに思い出されるのは「特研（特別研究）」の風景です。院生が自らの研究テーマに沿って発表を行い、先生方や他の院生から指導・意見・アドバイスを受け、その後の研究をさらに深化させていくという研究指導科目にあたるものですが、ひとつの発表に対して、美術史・歴史学・比較文学・言語学・文化人類学・社会学など多彩な専門分野の先生方の意見が飛び交う本専修ならではの「特研」は、毎回緊張し通しの、しかしそれ以上に刺激的な時間でした。

修士課程の2年間は、領域横断的な学びのあり方に接するなかで、内に閉じがちな自らの関心や問いを自覚し、いかに意識的に広げるかということが、常に課題であったように思います。現在、人文科学系の学術出版社で編集者として働いていますが、一から本づくりをするうえでも、それは変わらず自分のなかの課題であり続けています。

これから入学予定の方も在籍中の方も、目指すところは様々かと思いますが、研究が必ずしも将来に直結するとはかぎりませんが、専修で学んだ思考の方法や姿勢はどんな環境でも生きてくるはずなので、ぜひ広い視野をもって、自由にいろいろなことを経験してください。

D・Tさん
2014年度博士課程前期課程修了
〈修士論文題目〉
「反マフィア活動家」ベッピーノ・インバスタート研究
―その生涯と時代、そして現在―

文化動態学専修では、文学はもちろん、歴史学、美術、文化人類学、社会学などを専門にする先生方がおられ、私の研究テーマに対して様々な角度からアドバイスを提供してくださいました。自分の専門外の知識がない分、苦勞することもありましたが、そのおかげで納得のいく形で研究を進めることができ、修士論文の内容も充実させることができました。

大学院の2回生の後期から半年間、交換留学制度を利用してイタリアの国立ナポリ東洋大学に学びました。留学先では、自身の研究テーマに関する文献を調べ、フィールドワークも行いました。この経験は、私の研究活動をより濃いものとしてくれたと思っています。

2年間という時間はあっという間ですが、各分野の専門の先生方のサポートを受けながら自分の研究テーマを深め、充実した研究活動を行ってください。

Matthieu BORTERさん
(マテュー・ボルテール)
2015年度
博士課程前期課程修了
〈修士論文題目〉
北澤楽天と明治・大正期における
コマ漫画の出現

私が研究のテーマとして取り扱っているのは、日本初の職業漫画家であり、「日本近代漫画の祖」と呼ばれる北澤楽天のギャグ漫画です。修士論文では、楽天と同時代の人々にとって「漫画」とはなにを意味していたのか、いかなる社会・文化的な状況が楽天による4コマ漫画出現を促したのか、また、楽天独自の表現方法の特徴とは何かを明らかにしました。

漫画は、学問的研究の分野としてまだ新しく、文学や美術史はもちろんのこと、社会学や人類学など色々な角度からのアプローチが可能です。文化動態学専修には、ひとつの分野にこだわらず、様々な専門で幅広く研究されている先生方が多くおられます。新しく入学される皆さんの知的好奇心を存分に満たしてくれる先生と興味深い研究テーマがきっと見つかるはずです。

現代東アジア言語・文化学専修

Modern East Asian Languages and Cultures

ダイナミックに変容する東アジアの「現在」を
多様な視点で分析。

教学概要

現代の東アジア地域では、ヒト・モノ、あるいはそれらが生み出す文化が国境を越えて共有化されていく一方、それによる様々な摩擦や相違も生じています。本専修では、こうした複雑かつ多様な東アジア、とりわけ現代中国（香港・澳門・台湾を含む）および朝鮮半島を対象として、その言語や文化、あるいは歴史や社会に関する諸現象／事象について、実践的な中国語・朝鮮語を駆使し、さまざまな人文学的手法を用いて分析・研究しています。また、大学院生の多くは、キャンパス内での研究だけでなく、ダイナミックに変容する東アジアの「現在」を体感すべく、学外・海外での調査や長期留学をしています。



教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
あんご 庵 由香 教授	 朝鮮近現代史、 日韓関係史	植民地政策と朝鮮社会の変容をテーマとして、主に戦時体制の形成・仕組み・実態について研究しています。最近では在朝日本軍（朝鮮軍）研究や歴史葛藤問題、特に朝鮮人強制動員問題などにも取り組んでいます。
上野 隆三 教授	 中国語映画、 中国文学	中国語映画を中心とした東アジアの映像文化を主なテーマとしています。もともと中国古典文学を専門としていたもので、その研究も続けていますが、この専修では授業でも映画を中心に扱います。
宇野木 洋 教授	 中国現代文学、 文化批評	同時代中国の文学事象・文化批評が研究対象です。文学者たちが、中国という政治的「磁場」に、時に翻弄されながらも、ダイナミックに創出している文学テキストを、熱く考察しています。
佐々 充昭 教授	 朝鮮近現代史、 現代韓国文化論	植民地期朝鮮における宗教とナショナリズムの関係のほか、最近は韓国大衆文化の分析を通じて、東アジアにおけるグローバル化とナショナリズムの相補性の問題などについて研究しています。
三須 祐介 准教授	 近現代中国演劇、 台湾文学	主に、20世紀前半の上海における演劇文化及び戦後台湾文学とセクシュアル・マイノリティーの関係について考えています。
宮内 肇 准教授	 中国近代史、 中国社会史	中国華南地域社会の近代史、とくに広東省の農村社会における伝統性とその変化から中国基層社会の特質を考えています。

特色ある授業・活動

複雑かつ多様な現代東アジアの諸現象を分析すべく、専修の全教員と特任教授が指導を行う「特別研究」を実施し、研究の専門性だけでなく、広い学問的視座とその知識の習得を目指しています。また、本専修では、海外における東アジア学の研究動向を把握し、かつアジアの学生との相互理解を深めるために、とくにアジア圏（中国・台湾・韓国など）の大学／大学院との学術交流を積極的に行っています。

さらに、本専修では、「現地で学ぶこと」と「東アジアで活躍する人材育成」を目的として、韓国・中国への留学を強く勧めています。とくに、Dual Master's Degree Program (DMDP)を活用し、本校と留学先大学との2つの修士号を取得するプログラムに参加する院生も多く、そのための指導やサポートも充実しています。

修了生の紹介

（株）朝日新聞社
武長 佑輔さん
2015年度博士課程前期課程修了
〈修士論文題目〉
日中韓助数詞の比較研究

「新しい専修だからこそ魅力」

私の研究分野は「日中韓対照言語学」ですが、他の院生の研究の分野は、「近代韓国文学」や「日中対照文学」、あるいは「ネット文学」と、さまざまです。しかし、自身と異なる研究分野について知り、また考えることは、自身の研究にも大きな刺激となります。

自身の関心に基づいて研究について報告を行い、専修所属の先生方から指導を受ける「特別研究」は、本専修の根幹をなす授業であり、本専修の大きな魅力です。院生は必死に報告の準備をし、先生方もそれに対して、真摯かつ本気で応えてくださる。そうした雰囲気がかつさらに強いのが本専修の特徴です。

特別研究による先生方の指導、院生同士の切磋琢磨を経て、論文を執筆していきます。本専修第一期生ということで、暗中模索の中での論文執筆となりましたが、二年間積み重ねた研究蓄積は大きな助けになりました。論文テーマの設定から、内容の研鑽まで、本専修で勉強したからこそその魅力を反映した論文を執筆することができました。

2014年に新設された本専修は、新しいだけあって、院生の手で創り上げていくことができます。院生同士の興味・関心を共有し、またそれを自身の研究に活かすことで、研究の視野は大いに広がり、東アジアの幅広い知識を習得することができます。



「特別研究」の授業風景

立命館大学大学院
文学研究科人文学専攻
現代東アジア言語・文化学専修
博士課程後期課程

岡崎 享子さん
2016年度博士課程前期課程修了
〈修士論文題目〉
金時鐘の言語観に
ついての考察
ー「在日朝鮮人語としての
日本語」とは何かー

「韓国・高麗大学校での研究留学をいかして」

私は、在日朝鮮人の詩人である金時鐘（1929～）の文学作品を言語とアイデンティティの観点から研究しています。研究分野についてより専門的に学ぶため、共同学位プログラム（DMDP）で韓国の高麗大学大学院韓国文学学科に一年間留学しました。高麗大学では、韓国語の習得と同時に、本格的に朝鮮近代文学について学び、文学作品の分析方法をしっかりと身に付けることができました。その後、修士論文では、両大学で学んだ経験を活かし、金時鐘と尹東柱や金素雲といった朝鮮近代文学史において重要な詩人の文学作品を比較分析することによって、金時鐘の「在日朝鮮人語としての日本語」と朝鮮近代文学との影響関係について論じました。

本専修では、東アジアというフィールドの中で、様々な研究テーマを持った学生が自由に自身の専門を深めることができる環境が整っています。それぞれの研究を多角的な視野で指摘し合うことができる雰囲気の中で、私も金時鐘と韓国の詩人との比較分析という研究方法を見つけることができました。今後は、本専修の博士課程後期課程に進学し、金時鐘の文学作品と尹東柱を始めとする朝鮮近代文学との関係性をより深く研究する予定です。日本における金時鐘の文学についての研究だけに留まらず、東アジア、さらには世界における在日朝鮮人文学の存在意義について探究したいと考えています。



韓国・高麗大学校のキャンパス風景

CCTV 大富
江島 未夏さん
2015年度博士課程前期課程修了
〈修士論文題目〉
幾米作品が
中国で流行している
原因を探る

「中国・広東外語外貿大学での研究留学」

私は、台湾の絵本作家「幾米（ジミー／1958年～）」の作品を研究テーマにしています。幾米の作品は、現在、台湾だけでなく、中国大陸や香港の若者の間でも流行しています。本専修では、こうした近年の新しい作家や、最新の文化などを研究テーマにすることができます。この専修では、東アジアの文学や歴史、文化、それぞれの国との関係性など、様々な分野に精通した先生方がいらしています。そして、院生一人ひとりの研究テーマに対して、各先生がそれぞれの立場から指導をしてくださいます。それは、時に、自分では思いもつかなかったことに会うこともありますし、あるいは自身の視野が広がったことも少なくありません。この専修で自身の好きなことを自由に研究できるのは、こうした先生方のバックアップがとても大きいと感じています。

私は2014～2015年に、DMDPを利用して、中国の広州にある広東外語外貿大学に留学しました。この大学は「白雲山」という山の麓にあり、自然に囲まれた環境で気持ちよく研究をしています。また、同校は中央アジアや南米、アフリカ大陸などからの留学生も多く、日本では出会えないさまざまな国の人と交流しつつ充実した留学生活を送っています。

留学先での授業は、中国人の中に私ひとりという環境で、主にパワーポイントを使った研究発表や、先生も交えて討論をしています。その中で、日中両国の考え方や文化の違いを、身をもって学んでいます。

将来はこの留学で習得した中国の文化や中国に住む人々の慣習、そして中国語を駆使して、中国や中国の人々と関わりのある仕事をしたいと考えています。



留学先の「同学」と白雲山にて

「マイナーな研究でも尊敬される専修」

私は本専修在学期間に、ジェンダーの視角から日中英三ヶ国の「やおい小説」（Boys love）の比較研究を行い、修士論文を作成しました。このテーマは非常にマイナーな研究課題ともいえるもので、先生方にとっても馴染みのないものでした。進学当初、私は、先生方が私の関心について興味・関心をもってもらえないのではないかと非常に不安でした。ところが、毎回の研究報告では先生方だけではなく、他の大学院生からもたくさんの質問とアドバイスを受けることができました。とりわけ、先生方は私のテーマや関心について、積極的に理解しようとしてくださり、それぞれの研究分野に基づいた有意義なアドバイスをしてくださいました。マイナーあるいはあまり注目されていない研究テーマであっても、ひとしく学問の多様性とその価値を尊重するのが現代東アジア言語・文化学専修の大きな魅力だと思います。

本専修には中国人、韓国人の留学生も多く、つねに異文化の違いに刺激される環境にありました。本専修は歴史の長い専修ではないため、研究室としての堅い決まりごととも少なく、院生が自分の個性に合わせて、比較的自由に研究が出来ます。先生たちも非常に柔軟的に接してくださいます。

また、私は在学中に、「日中韓連携講座」という授業を受講し、中国の広州と韓国の釜山に何回も訪問し、東アジアの同世代の人々とコミュニケーションを密に取りあい、充実な大学院生活を送ることができました。私は今後本専修での経験を活かし、東アジア、しいては世界で活躍するビジネスマンになるべく努力していきたいと考えます。



東アジアの同世代との交流

英語圏文化専修

Language and Area Studies of English Speaking Countries

「英語圏地域文化領域」と「英語学・言語学領域」を
分野横断的かつ専門的に研究する。

教学概要

英語運用能力を磨き、言語と文化を、分野横断的な視野を保ちつつ専門的に探究する専修です。ことばの流れや人の移動などが引き起こすダイナミックな変化を、過去、現在、未来に意識を開いて追究していきます。日常的な人間の表現活動を洞察し、「表現されたもの」と「表現されなかったもの」の意味を考えます。異なる専門分野の研究者が連携し

て、現代社会の要求にこたえられる超域的な学際研究を目指しています。本専修は、英語圏の歴史や文化を研究する「英語圏地域文化領域」と、人間のことばの見地から研究する「英語学・言語学領域」の二領域があります。いずれの領域でも、理論と実践のバランスを重視し、論理的な批評能力や創造性を養うことを目指します。

教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
Matthew Apple 准教授	English education, second language acquisition, educational statistics.	My research concerns the individual differences among various learners of English as a foreign language, in particular how psychological traits such as motivation, learning beliefs, language anxieties, and linguistic and intercultural competencies influence the language learning process.
ウェルズ 恵子 教授	口頭文化論、アメリカ(文学)研究、アメリカ黒人文化、音楽文化、民話、民謡、宗教歌、民衆文化、比較文化	「声の文化」をキーワードに研究。歌や詩、物語、語り、ヴァナキュラー文化のなかの物語性と詩的要素、などを主な研究対象とする。日々の暮らしや感情の動きと文学・文化との関わりを読み取り、現代を透視したいと思っている。アフリカ系アメリカ人の歌と民話、詩の研究、および日本文化に関する比較文学研究も行っている。
岡本 広毅 准教授	中世英語英文学、英語の歴史、文化史	現代英語のルーツである中世イングランドの言語と文学を研究している。特に、アーサー王物語をはじめとする中英語ロマンス作品に関心がある。また、中世の言語や神話伝承・物語はファンタジー文学の形成とも関連しており、歴史的視点から現代の英語文化の源流を理解するよう心掛けている。
岡本 雅史 教授	認知言語学、語用論、コミュニケーション研究	人間はいかにして言語を用いてコミュニケーションを行うことができるのか、世界をどのように言語によって分節化し、認知しているのか、どのようにして世界と現実感(リアリティ)を持って接することができるのか、等について言語・非言語の観点から考察・研究を進めている。
小川 真和子 教授	アメリカ研究、日米関係ならびに日系アメリカ人漁業者の歴史と文化	日米やハワイを軸とする、太平洋地域における、国境を越えた人々の移動を、社会史、産業史、外交史的な観点から研究。具体的にはキリスト教関係者による社会改良運動や国際平和運動、また日本人ハワイ移民の手による水産業の振興や漁村文化の発展などを探究している。
坂下 史子 准教授	アメリカ研究、アフリカ系アメリカ人の歴史と文化	人種暴力の歴史と公的記憶について、人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティの視点から、歴史学やカルチュラル・スタディーズの手法を用いて研究。近年では、公民権運動時代以降に生まれ育った「ポストソウル」世代のアフリカ系アメリカ人の文化を、歴史的記憶の継承と断絶の側面から考察している。
佐野 まさき 教授	理論言語学、対照言語学(特に日英)、生成文法理論、統語論、意味論	ある言語(英語など)では形の違いに反映されない意味の違いが、別の言語(日本語など)ではどのような形の違いに反映されうるか。このような、形と意味の関係を手がかりに、人間言語すべてに共通する普遍的な文構造や意味構造を解明し、各言語の個性も明らかにしていく。
根本 浩行 教授	社会言語学、社会文化理論、第二言語学術リテラシー、他言語話者への英語教授法	言語そのものだけではなく言語使用者に焦点を当て、認知的要因と社会文化的要因(文化、社会、言語使用環境、コミュニティ、言語使用活動、ネットワーク、アイデンティティなど)を考察しながら異文化適応、第二言語習得、学術リテラシー、英語教授法などを研究している。

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
米山 裕 教授	アメリカ史、日系アメリカ人史	アメリカ合衆国における日本人移民・日系アメリカ人のアメリカ社会への参入過程を、農業や漁業といった生産活動や日本人会のような自発的団体の活動を通して明らかにすることを目指している。また、北米、南米、東アジアを含む広範な環太平洋地域における日本人の国際移動について、学際的な共同研究を進めている。

特色ある授業・活動

「英語圏地域文化領域」では、講演会や学術的企画を通じて海外の著名な研究者と交流する機会も多く、院生は積極的な役目を担っています。分野横断的な学びと自由な発想が奨励されるなかで、院生は学会発表など本格的な研究活動も意欲的に行っています。

「英語学・言語学領域」では、英語の言語学的研究および英語と他言語(特に日本語)の比較対照研究などを扱います。統語論、意味論、語用論といった様々な視点から、人間が持つことばの性質を明らかに

していきます。他専修や他研究科の関連領域とも有機的な関係を結び、自らの関心や主体的な研究を重んじつつ、異なる研究テーマでもお互いを刺激し学び合いながら、柔軟でかつ独創的な思考力を伸ばします。

両領域ともに、院生が各自の研究報告を行う「特別研究」では、専門分野を異とする専修教員全員によって、きめ細やかな指導が行われます。

予想される進路

研究職、教職、企業や公共団体の国際関連部門社員および職員、出版、教育、ジャーナリズム関連職などが期待できます。英語圏文化専修では、広い分野を扱い(言語、歴史、地域研究、文化研究、コミュニケー

ション研究、文学)、教員の専門にもバラエティーがあるので、修了生の進路も多様に展開します。高い英語運用能力および文章表現力、現象に対する鋭い批判力は、いかなる職業にも求められるものです。

在学生・修了生の紹介

修了生
愛知県立高等学校非常勤講師
早川 明郎さん

私はアメリカの黒人音楽史研究を中心に取り組みました。とくに、戦前に活躍し後の多くのミュージシャンに影響を与えたといわれるブルースシンガー、Robert Johnson (1911-1938)に焦点を当てました。Robert Johnsonに関するレビューや書籍などの文字資料を時代背景と照らし合わせ、彼の知名度がどのように広がったのかを分析しました。現代ポピュラー音楽に大きく影響した黒人のルーツ音楽を、歴史や社会の文脈で学ぶことで理解は一層深まります。この専修では、英語圏の歴史、文学、言語学など幅広い視点から指導やアドバイスをいただけ、非常に有意義な研究生生活を送ることができました。専修で学んだ経験は、教職という現在の仕事で大いに役立っています。

博士後期課程 在学中
山崎 遼さん

私は文学研究と民俗学の理論・方法論を用いて英国の口頭伝承(伝承歌や物語など)を研究しています。特に注目しているのはスコットランドの少数民族スコティッシュ・トラベラーの伝承者Stanley Robertson (1940-2009)で、彼の著作におけるトラベラーの自己表象を解明することを主な研究目的としています。そして、口頭伝承研究を通して「人はなぜ歌を歌い、物語を語るのか」という疑問に迫っていくことを長期的な目標としています。英語圏文化専修の大きな特徴は、関連しつつも専門領域が異なる先生方と院生がいるので学際的な研究が可能であり、多様な観点から研究へのアドバイスもらえる点です。この専修で皆さんと一緒に学べる日が来ることを楽しみにしています。

博士後期課程 在学中
猪熊 慶祐さん

私は19世紀アメリカの大衆文化を研究しています。特に、役者が顔を黒塗り(ブラックフェイス)にして演じる minstrel ショーを研究しています。昨今メディアでも取り上げられていますが、まだ不明なことがたくさん残っている分野です。研究目的は、minstrel ショーが本来どのような演芸で、アメリカ社会にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしていくことです。この専修では、自分の研究対象を様々な分野の視点から捉えなおす機会が得られ、充実した研究生生活を送ることができます。そのような環境で先生方からも率直で洞察に富んだ助言をいただき、院生同士では先輩後輩の関係なく意見を交換し合い、日々切磋琢磨しています。ぜひ門を叩いてください。

博士前期課程 在学中
中谷 可惟さん

「芸術とは何のためにあるのか」という問いに答えるため、ジャズという音楽文化の記録を辿り、そこに携わった人々が何を考え実践してきたのか探究しています。修士論文では、「ジャズの帝王」と呼ばれた Miles Davis (1926-1991) の名盤 Kind of Blue (1959) が、アメリカのジャズ批評史でどう位置付けられてきたかを研究テーマにしています。本専修の特色は、分野の垣根を越えて様々な先生方や院生から常に新鮮な指摘が受けられるところです。自分のテーマや研究手法をいつでも客観視しながら研究に臨むことができます。研究はいつも地道で個人的な作業の積み重ねですが、時には院生同士での刺激によって大きく前進することもあります。そのような仲間がさらに増えてゆく事を心待ちにしています。

博士課程前期課程 在学中
小泉 佑果さん

思わずその世界に引き込まれてしまうような〈語り〉に出会うことはありませんか。その語りの魔力を解き明かすことが私の研究テーマです。ナラティブ、語りの研究をしています。私はおとぎ話や日常会話の語りなど、物語ることの周辺にあるように思える語りを研究対象としています。英語圏文化専修には、幅広い研究テーマを持った意欲溢れる大学院生が集まっています。また院生をいつでも熱意と真心で導いて下さる先生方がいて、研究に打ち込む環境としてこれ以上の場所はないと私自身いつも感じています。新しい仲間をいつでも暖かく受け入れてくれるのも、この専修の良いところです。この専修では、きっと有意義な時間が過ごせると思います。

地理学専修

Geography

自然地理学から人文地理学にわたる広い領域が学べ、GIS研究では世界最先端の研究拠点です。

教学概要

本学の地理学教室は、1935年に西日本の私学において最初に設立されました。文学研究科に地理学専攻が設置されたのは1954年です。以来、当教室は研究者を養成し続け、多数の修了生が全国の大学や研究機関に勤務しています。「研究一貫コース」は、上記のような人たちに続く若手研究者の育成を目的としています。「高度専門

コース」では、都市計画コンサルティング企業に勤務するGISの専門家、公務員、民間企業社員、中学校・高等学校の教員などの有為な人材を養成してきました。特に教員に関しては、教育現場で即戦力として採用されています。当専修修了生の全国各地での活躍により、「立命の地理」は学界、教育界、実業界において高い評価を得ています。

教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野 ・ 研 究 の 特 色
遠藤 英樹 教授	観光社会学、現代における社会・文化に浸潤するツーリズムの考察、国内外における観光とポピュラーカルチャーの関わり
加藤 政洋 教授	文化地理学、近現代都市をフィールドとした文化地理学的研究と都市論
河島 一仁 教授	歴史地理学、職人集団（特に鍛冶と鋳物師）の歴史地理・アイルランドの歴史地理・野外博物館の研究・大学の歴史地理
河原 典史 教授	歴史地理学、近代の日本・朝鮮・台湾における水産業の歴史地理、カナダ日本人移民史研究
神田 孝治 教授	文化地理学、観光学、文化・空間論的視座からの観光地の形成過程に関する研究
古賀 慎二 教授	都市地理学、現代都市の内部構造に関する地理学的研究、オフィス立地研究
高橋 学 教授	自然地理学、環境史・土地開発史・災害史・環太平洋地域の災害リスクマネジメント
花岡 和聖 准教授	地理情報科学、国内外の人口統計データを用いた地理学的研究（ライフスタイル、災害復興、人口移動、ビッグデータ）
松永 光平 准教授	自然地理学、砂漠化
矢野 桂司 教授（文化情報学専修）	地理情報システム（GIS）と地理情報科学を活用した地理学的研究、京都の歴史GIS、デジタル・ヒューマニティーズ
山本 理佳 准教授	文化地理学、景観論、近現代都市における観光資源化のプロセスの研究
生田 真人 特別任用教授	経済地理学、観光事業の経済地理学的研究・大都市開発の国際比較・日本の地域政策・東南アジアの経済地理
片平 博文 特別任用教授	歴史地理学、古代～中世平安京（京都）とその郊外の風景に関する歴史地理学研究

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野 ・ 研 究 の 特 色
藤巻 正己 特命教授	社会地理学、マレーシア、台湾の周辺社会集団（少数民族・貧困層・外国人労働者）と観光に関する社会地理学的研究

特色ある授業・活動

前期課程1回生の登録必修科目に位置づけられている「地理学フィールドリサーチ」では、前期の「同Ⅰ」と後期の「同Ⅱ」の両方の履修を前提として、授業が展開されます。本授業では、地理学における論文作成に必要な、高度な野外調査技法の習得をめざすことを目的として、毎年特定地域を対象とした授業を実施しています。大学院ゼミは、前期課程と後期課程の全大学院生と全教員が一堂に集まり、集中的に指導する体制で、各院生の研究発表に関する助言・議論を行っています。

修了生の主な就職先・就職状況	
博士課程前期課程修了者の3割程度は他大学を含めた博士課程後期課程へ進学します。他に、小中高教員、公務員一般職、一般企業、大学教員が主たる進路です。	最近10年間の主な就職先（順不同） ●平安女学院大学 ●東北大学 ●北海学園大学 ●徳島大学 ●愛知大学（2名） ●立命館大学 ●東京大学（2名） ●熊本大学 ●福岡大学 ●日本福祉大学（職員） ●愛知県中学校 ●智辯学園和歌山中学・高等学校 ●帝塚山中学校・高等学校 ●京都女子中学校・高等学校 ●奈良県小学校 ●警視庁 ●長野県原村役場 ●バスコ ●キャドセンター ●ESRIジャパン ●NTTデータ関西 ●安田不動産 ●東急リパブル ●三井住友銀行 ●ゼンリンジオインテリジェンス など

修了生の紹介

関西大倉中学校・高等学校 教諭（社会科主任） 野村 智さん 2000年度博士課程前期課程修了 修士（文学）取得	 本大学院の魅力の一つは、専門性が異なる多様な先生方が在籍していることです。地理学は文理に立脚した学問ですが、ここには院生の様々な研究内容をサポートする環境が整っています。私は、「琵琶湖における水位変化の特性とその要因」と題して、修士論文を執筆しました。先生方と院生が全員参加するゼミでは、専門の水文学の見地からの指摘だけではなく、データ解析の手法などの他分野からの助言がとても役立ちました。他方、当時は偶然にも、院生仲間も私も含めて、半数以上が他大学の出身者で、本大学院の門戸の広さと地理学を志す学生を温かく迎えてくれる雰囲気があり、良き友にも恵まれ、安心して研究活動に没頭できました。 私は現在、関西大倉中学校・高等学校にて社会科教諭として、地理教育に従事しています。地理の授業では、院生時代に身に付けた専門的な知識が役立っているのはもちろんですが、大学受験に向けた推薦書の作成には論文執筆の能力が、保護者懇談会にはレジュメとパワーポイントを援用した学会やゼミでの発表経験が、大いに活かされています。また、豪州でのホームステイ引率時には急遽、現地校にて英語で地理の授業をしましたが、ハーバードプログラムでの体験が役立つなど、院生時代の2年間における多くの出会いや経験、修得した知識が、現在の充実した毎日の糧となっています。 これからの自分自身の人生を豊かにするために、本大学院の門戸を叩いてみてはいかがでしょうか。
ESRIジャパン株式会社 プラットフォームソリューショングループ シニアGISプロダクトスペシャリスト 福島 康之さん 2006年度博士課程前期課程修了 修士（文学）取得	 私は、現在、GIS（地理情報システム）上で使えるデータ製品とサービスの開発を手がけています。製品の企画は、大学院生のときに「面倒な前処理を必要とせず、すぐに使えるGISデータがあったら便利なのに…」と考えたことが原点になっています。学生時代に得た、地図やGISに関するさまざまな知見を、可能な限り盛り込んで、製品開発を進めました。製品をリリースしてから数年後、営業担当者に同行してある大学を訪問した際に、「この製品は、地理学をわかっている人が作っている」とお褒めの言葉をいただいたことは、何にも代え難い喜びでした。そのときの「学んだことが仕事で生きている」と感じた喜びが、今も仕事に対する原動力の一つになっています。 立命館大学大学院地理学専修には、高機能なGISを自由に使える環境があります。GISで活用できる充実したデータもあります。さらに、マップライブラリーには古今東西を問わず膨大な数の地図、図書館や文献資料室には豊富な専門書等の蔵書があり、これらのリソースを自由に研究に活用することができます。そして何よりも、日本の地理学をリードする先生方から直接ご指導いただけるのが特長です。多様な専門分野を持つ先生方が勢揃いする大学院ゼミでの発表における、厳しくも温かいご指導は、大きな刺激となり、その後の人生における糧となることは間違いありません。 GISを使った研究を行うのに、これほど恵まれた環境は他にないと思います。ぜひ、この最高に恵まれた環境を生かし、学びを深めていってください。
熊本大学 文学部 総合人間学科准教授 米島 万有子さん 2013年度博士課程後期課程修了 博士（文学）取得 〈博士論文題目〉 蚊媒介性感染症のリスクに関する 地理学的研究 —日本における感染症の流行リスクと 対策に伴うリスクの把握—	 現在、私は熊本大学に勤務しています。講義を受け持つ側になって大いに役立っていることは、大学院時代に学んだ幅広い地理学の知識と、活発に議論が繰り広げられたゼミの経験です。立命館大学地理学教室では、講義形式の授業のほかにGIS実習、フィールドワークなど多様なカリキュラムが用意されているとともに、多岐にわたる専門分野の教員と院生全員でゼミが行われています。そのため、自分の専門分野のみならず、多種多様な地理学の分野に触れ、多くの知識や技術を得ることができます。これらの経験は、多様性が求められる大学の教育や研究に大いに役立っています。 研究では、大学院時代からフィールドワーク、資料調査、社会調査などの方法によって収集したデータをGISによって分析し、蚊媒介性感染症の流行リスクマップの作成に取り組んでいます。欲張りなほど多くのことができたのも、地理学教室所属の幅広い専門分野の先生から指導を受けられる環境、豊富な資料やデータの所蔵環境、GISや統計の分析を行える環境を大いに活用させていただけたおかげです。また、研究を進めるにあたって、衛生動物学分野の先生にも指導を受け、共同研究を行っていました。個人研究、共同研究の両方が根付いており、地理学だけでなく他分野の学問と融合することを大学院時代から取り組むことができる環境にあったことは、現在の研究の糧になっています。 立命館大学の地理学教室、地理学に関心を持つみなさん、ここには多くの良いチャンスに溢れています。研究面だけでなく、TA（ティーチングアシスタント）として教育側を経験できる機会や奨学金など様々な充実した支援もありますので、ぜひ積極的に動いてほしいと思います。

文化情報学専修

Digital Humanities for Arts and Cultures

様々な形態の文化を保存・理解・継承・活用、
さらには新しい文化創生を実現。

教学概要

デジタル時代の今、歴史・文化・芸術を対象とした研究にもデジタル技術を導入した研究手法が急激な勢いで導入されてきています。これを文化情報学と称し、専修では様々な形態の文化を保存・理解・継承・活用、さらには新しい文化創生を実現するための研究をします。

専修では、国内外の著名な博物館へのインターンシップや、学内のアート・リサーチセンターや歴史都市防災研究所で実施されている研究プロジェクトに参加し、実践的な研究環境の中で問題意識を持ち、論文をまとめていくという新しいスタイルのカリキュラムを提供します。この分野の人材は、大学だけでなく、教職、図書館、博物館、出版業界、自治体などから広く求められています。

教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
赤間 亮 教授	デジタル人文学、 日本文化・芸術学	デジタル・アーカイブ技術、データベース技術による日本文化・芸術分野の研究環境の構築、 ならびに絵画（浮世絵）や無形文化財資源研究。
河角 直美 准教授	歴史地理学、 歴史GIS研究	近代の京都とその周辺を対象とした歴史地理学、歴史GIS研究を専門としています。特に、 近代期に作成された大縮尺地図を活用し、景観や生活スタイルの詳細な変化を把握することから環境史を構築することに関心があります。またデジタル人文学にも関心を持ち、高度 成長以前の暮らしに関する記憶のデジタルアーカイブにも取り組んでいます。
西林 孝浩 教授 （文化動態学専修）	仏教美術を中心とした 東洋美術史	龍門石窟や敦煌莫高窟における造像主題や様式分析の他、漢代から南宋時代までの美術交 流史に関心を持っています。中国美術における規範の形成やその揺らぎ等の問題について、 シルクロードを通じたインド・中央アジア美術の伝播や、日本美術の展開も射程に入れ、作品 に即し分析しています。
八村 広三郎 特別任用教授 （情報理工学部）	画像情報処理、 モーションキャプチャを 使ったデジタル・ アーカイブ研究	無形文化財のデジタル・アーカイブ、祇園祭のバーチャル山鉾巡行、仮想巡行体験、古典籍 の画像解析、類似画像検索など。
矢野 桂司 教授	地理情報科学	地理情報システム（GIS）と地理情報科学を活用した地理学的研究、京都の歴史GIS、デジ タル・ヒューマニティーズ。
湯浅 俊彦 教授	図書館情報学、 メディア論	「デジタル環境下における出版ビジネスと図書館」が主な研究テーマ。電子出版と電子図 書館の課題を探究。

特色ある授業・活動

国内外博物館・美術館、文化財団、デジタル系
企業などでインターンシップ実施。

文化情報学専修では、国内外の博物館・美術
館、文化財団等での学芸員などの仕事やデジタ
ル系企業の活動内容を理解し、運営企画などを
体験することができるインターンシップを専修科
目として開設しています。

プロジェクト演習Ⅰ（国内インターンシップ）

〈これまでの受け入れ機関〉

- 「京都市指定有形文化財」長江家住宅 ●京セラコミュニケーションシステム
- 京セラ丸善システムインテグレーション

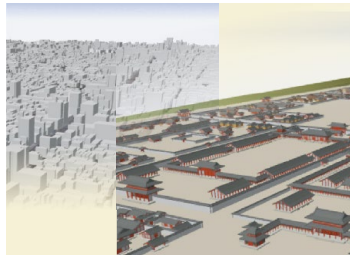
プロジェクト演習Ⅱ（海外インターンシップ）（L）

〈これまでの受け入れ機関〉

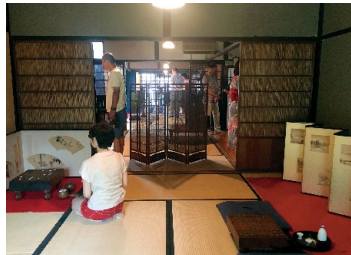
- 英国・大英博物館アジア局日本部門 ●ケンブリッジ大学図書館日本語コレクション部
- 米国・メトロポリタン美術館アジア美術部門日本美術セクション



浮世絵データベース



バーチャル京都



インターンシップ 於 長江家住宅

修了生の主な就職先・就職状況

2014年度新設の文化情報学専修は、2016年3月に前期課程
で第1期修了生が出て、IT関連会社への就職や博士後期課程
へ進学しています。本専修のベースとなった日本文化デジタル・
ヒューマニティーズ拠点に所属した博士課程後期課程の修了者
の多くは大学教員、美術館・博物館学芸員として就職しています。

主な就職先（順不同）

- 東京大学 ●徳島大学 ●横浜市立大学 ●バンコク大学 ●立命館大学
- 日本女子大学 ●大英博物館 ●メトロポリタン美術館
- 大阪市立東洋陶磁美術館 ●早稲田大学演劇博物館 ●京都文化博物館
- 国際日本文化研究センター

修了生の紹介

日本女子大学助教

鹿内 菜穂さん

2013年度情報理工学研究科
博士課程後期課程修了

〈研究テーマ〉

ダンスの身体表現における
感情認知とインタラクションに
関する研究

修士課程までは心理学を専攻し、舞踊・ダンスと心との関係について勉強していました。その過程で、心だけでなく、心と身体動作の相互
関係に興味を持ち、そのためには動作の数値化・量化が必要であるという考えから、博士課程は理工学研究科に進学しました。文系から理
系への変更、いわゆる理転です。情報学・工学に身を置いて、モーションキャプチャやコンピュータグラフィックス等の高度な技術、方法論や
解析法の知識を得ることができました。しかし、工学の視点に加え、舞踊・ダンスという文化芸術を、異なる角度から考察する基礎を築いてく
れたのは、文化情報学専修のベースである日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点の先生方のご指導や、セミナーで集まる先輩方のご意
見でした。

現在も舞踊動作の定量化に関する研究を続けていますが、大学の授業は体育を担当しています。体育はダンスだけではないため大変なこ
ともありますが、だからこそ、異なる方法論や考え方が効果的に授業を進める上で役立っていると感じています。専門を深めることは大事な
ことですが、それが独りよがりになってしまうのは、社会から求められていることや物事の本質を見失いがちになります。文化情報学専修で領域を超
えた視点を持ち、多様な見方ができる研究姿勢をぜひ身につけてほしいと思います。

タイ バンコク大学助教

Worawat

Choensawatさん

2012年度情報理工学研究科
博士課程後期課程修了

〈研究テーマ〉

ダンスの表記法および
モーションキャプチャを使った
ダンスの体の動きのアーカイブ

私の博士論文は、様式化された日本の伝統的舞踊である、能の振り付けのための「ラバノーターション」ソフトウェアの実装について論じ
たものです。「ラバノーターション」は、人間の体の動きを記述するための、グラフィカルな表記の仕組みです。私は研究の方法論を学ぶとい
う最高の経験を得ただけではなく、他の分野の研究者と共同研究をするという経験をすることもできました。

この研究の挑戦的な問題の一つは、詳細な特徴、芸術的なニュアンス、抑制された複雑さの中にある伝統的舞踊の動作を記述する方法を、
表記法の記譜にどのようにして実装するかということです。この問題を解決するために、我々の研究チームは「ラバンエディタ」というソフト
ウェアを開発しました。この「ラバンエディタ」は、ラバノーターションの記譜の準備および、3Dキャラクターアニメーションをラバノータシ
ョンの基本的要素から生成するためのソフトウェアです。CGアニメーションをラバノーターションから生成する際、システムは、シンボルおよ
びそれに対応する体の部位のポーズとの間でのマッピングを行うためのモーションテンプレートファイルを用いて、シンボルをアニメシ
ョンキーフレームへと変換します。

それ以外の挑戦的なタスクは、人文系の研究者や専門家にとって実践的かつ役に立つソフトウェアを作成するために、どのようにして彼ら
と協調して研究を行うか、ということです。特に私の研究は、ユーザの要求を調査したり、能を実際に演じているビデオ映像のようなデジタル
コンテンツを獲得したり、ユーザ評価を行ったりするために、能の専門家およびラバノーターションの研究者と緊密に研究を行うことが求め
られます。我々の研究チームにおいて紹介したように、チームには3Dモデリングの専門家やラバノーターションの研究者や能の専門家が含ま
れています。

文化芸術や工学の多くの学問領域にわたる環境の中で学びたいという人は、ぜひ本学の文化情報学専修にて学ばれることをお勧めいたします。

文化情報学専修で学んだ思い出

現代のコンピュータ化された博物館環境において効率的に仕事を進められるのは、赤間亮先生の下で研究した、3年以上に亘るアート・リ
サーチセンター（ARC）での訓練の賜物です。それ以前にも美術史を学び、数年の学芸員経験がありましたが、現代の美術館業務はデータ
ベースとデジタル撮影を含むデジタル技術に関するより深い知識を必要としていると実感しました。私の目標は、美術史における伝統的な研
究手法とARCにおいて開発された新しい手法を結びつけ、デジタル・ヒューマニティーズの様々な側面を学ぶことでした。ARCで、浮世絵、
陶磁器、着物や地理学などさまざまな分野の研究者と共に研究を進められたことは大変刺激となりました。このような共同プロジェクトは珍し
く、私にとって新たな研究手法を経験し、それぞれの美術工芸を学ぶ助けになりました。赤間先生のもとでの研究は、特に複雑な高反射をす
る場合の漆器をデジタル撮影する手法の習得も含まれました。それに、データベース構築の手法を習得することも含まれ、これら一連の技術
は、美術館の日常業務に大きな助けとなっています。

現在の仕事との関係

学芸員の日常業務の中で、TMSと呼ばれる美術館の収蔵品を管理するデータベースの打ち合わせが月に一度必要とされます。研究目的
のために私たちは、日本語・英語両方のデータベースを使用しますが、画像のみで文字情報が全くない作品を調査しなくてはならないことが
よくあります。メトロポリタン美術館では年に2回、日本美術の展覧会を日本美術ギャラリーで準備します。光に弱い版画やテキスタイルのよ
うな作品は、3ヶ月しか展示することができないので、それぞれの展覧会では作品を2交代制で展示します。作品の展示準備には美術館収蔵
品からの選定も含まれ、さらに多数の写真と共に展覧会ウェブサイトに掲載する作品理解につながる解説の準備も含まれます。

考古学・文化遺産専修

Archaeology and Cultural Heritage

毎年実施する発掘調査に参加し、専門的な技術を修得できます。
報告書の執筆や研究プロジェクトに参加し、業績を積むことができます。

教学概要

日本列島および東アジアを中心とする考古学および文化遺産の保護・活用について研究できます。4名の教員は、旧石器・縄文時代、弥生・古墳時代、歴史時代、韓国考古学をそれぞれ担当しており、院生は自らの専門分野に近い1名の教員から主な指導を受けます。授業は各分野の講義と、発掘報告書の作成・執筆に至る過程を学ぶ実習、全教員から研究指導を受ける演習の3種類から構成されます。授業以外に、毎年実施する発掘調査や各教員の研究プロジェクトに関係した学会発表や論文執筆により業績を積むことも可能です。教員の指導の下、学部生との共同作業も一般的で、活気ある雰囲気の中で、院生・学部生・教員全員が切磋琢磨して研究しています。



教員の研究紹介

氏 名 ・ 職 位	専 門 分 野	研 究 の 特 色
木立 雅朗 教授	歴史考古学	西陣織・友禅の図案、須恵器窯、尾形乾山、京焼登り窯、陶器製手榴弾など、京都や窯業に関わる研究を続けています。
高 正龍 教授	日韓の歴史考古学	日韓の古代寺院や瓦の研究のほか、韓国の石造物や梵字の研究を行っています。
矢野 健一 教授	縄文時代	縄文土器・集落研究のほか、遺跡データベース作成・湖底遺跡調査・編物研究を手掛けています。理工系研究者との共同研究が多いです。
長友 朋子 教授	弥生・古墳時代	弥生・古墳時代の社会複雑化を土器生産という側面から研究しています。私の研究の特色は、韓半島の社会や土器生産へも目を向け、比較することで日本列島の土器生産の特質を見出そうとすることです。また、東南アジアの土器製作村を調査し、民族考古学的な視点からも研究を進めています。

特色ある授業・活動

毎年、夏季に実施する発掘調査は学部2回生配当の「考古学実習Ⅲ」として実施するもので、院生は単位取得の対象科目ではありませんが、TA（指導補助）として参加できます。合宿することも多く、発掘調査の一部始終を体験できます。毎年、4月に新入生歓迎会（お花

見）、7月に考古学談話会、12月に忘年会、2月に卒論・修論発表会と行事も多く、在学生と修了生との交流も盛んです。日本考古学協会や日本文化財科学会といった代表的な全国学会では、院生（学生）が参加する教員との共同研究の成果が必ず発表されています。

修了生の主な就職先・就職状況

博士課程前期課程修了者の7割程度は自治体の文化財専門職に就職している状況です。専門職希望者の就職率はほぼ100%です。他に、中高教員、公務員一般職、一般企業、博士課程後期課程進学、大学教員が主たる進路です。	主な就職先（順不同）
	●京都府教育委員会 ●京都市埋蔵文化財研究所 ●奈良文化財研究所 ●奈良県立橿原考古学研究所 ●山口大学 ●徳島大学 ●熊本県教育委員会 ●福岡市教育委員会 ●長野市立博物館 ●青森県教育委員会 ●天津市教育委員会 ●大阪府教育委員会 ●鳥取県教育委員会 ●兵庫県立考古博物館 ●大阪市立東洋陶磁美術館

修了生の紹介

現在の研究や仕事について

平城宮・藤原宮などの都城、および平城京や藤原京内にある古代寺院の発掘調査を軸として、発掘で出土した資料の調査研究をおこなっています。私が配属されているのは瓦の研究室なので、瓦の整理作業を通して古代の瓦作りについて研究しています。

大学院時代の研究が今の仕事にどのように役立っているか

大学院時代は、縄文土器の縄目文様や製作技法等を詳細に観察することによって人間集団の動態を読み取る研究をしていました。そのときに培った資料の観察方法や視点が今の仕事でも非常に役立っています。

大学院時代の研究で楽しかったことや大変だったこと

修士論文を書くために全国各地に資料調査に行ったことが印象に残っています。実際に現物を見てみると、自分の予想していたこととは違う場合も多々あり、自分の研究が振り出しに戻るような心細い気持ちになることもありました。しかし資料データを蓄積し、それが研究成果として形になる実感は何事にも代え難いものがありました。

立命館大学の大学院志望者に一言

私の大学院時代は、研究に対しても将来に対しても、これでいいのかなと手探りで迷いながら過ごした時間でした。大変なことも大いにあると思いますが、大学院で悩み、考えたことは必ず将来に生きていきます。立命館大学大学院は自分の研究に進んでくれるだけの十分な体制が整っています。地道に一步一步前に進んでいくください。

現在の研究や仕事について

京都府教育委員会で、奈良時代の宮都である恭仁宮の発掘調査や、京都府内の中世の城郭、館に関連する文献史料の集成作業をしています。昨年度は東日本大震災復興支援のため、福島県に一年間派遣されました。地域社会の維持にとって、有形無形を問わず文化財がいかに大事かを体感できました。

大学院で研究を続けたことのメリット

研究者の卵として学問に向き合う環境に浸れました。研究発表では先生たちが真剣に指導してくれましたし、他の院生の考古学へ取り組み姿勢を見て刺激を受けました。また、大学院では自分自身の研究活動が主体ですが、夏休みの発掘調査などにもリーダーとして取り組むことになります。当時は両立がつかったのですが、社会に出ると逆に仕事が完全に主体となり、研究をする時間をなんとか工面して作り上げることになります。

研究のおもしろさや醍醐味

やや抽象的かもしれませんが、これまで書いた論文や研究発表には、その時その時の自分自身の生き方（考古学への取り組み方、他の研究者からの影響、生活環境など）が如実に反映されているように思います。研究が私の人生の記録にもなっているのです。したがって、研究し続けると必然的に過去、現在、未来の自分と向き合うことになります。考古学をとおして自分と常に向き合い続けていられることがおもしろいです。

現在の研究や仕事について

福岡市では、市内にある遺跡の発掘調査を行い、そこから出土した遺物を検討し、毎年報告書を刊行しています。福岡市は板付遺跡や博多遺跡群など重要な遺跡が多く、また地理的に大陸と近いことから、様々な時代や当時の大陸との交流を考える上で非常に面白い場所です。

大学院で研究を続けたことのメリット

研究発表では、先生たちが真剣、かつ親切に指導してくれましたし、各時代の先生たちから、それぞれの研究の方法論など知ることができました。それを知ることで自分の研究の幅も広がりました。また他の院生の研究発表などを聞くことで刺激を受けていました。他にも研究会などに参加し、大学の先生方、行政の方、他大学の学生などと交流することで研究意欲を高めることができました。

大学院での研究で楽しかったことや大変だったこと

修士論文を書くために、資料調査に行ったり、研究会に参加したりと全国各地に行っていました。中には過密な行程のときもありましたが、実際にものを見たり、他の研究者と話したりすることで、自分の研究の筋道が出来上がっていくのは、非常にうれしかったです。他にも研究室の行事やゼミの作業など、自分の研究以外のことに時間を割かれることが多く、大変でしたが、それらを通して後輩や先輩たちと一緒に作業することは楽しかったです。

立命館大学の大学院志望者に一言

大学院の時期が様々なことをすることができる時期だと思います。自分の研究を進めるもよし、他の分野のことを勉強するもよし、多くのことを学べる時期です。そのため大学院では、自分の専門分野以外のことも積極的に勉強してください。研究対象にしくても、どこかで自分のためになります。立命館大学大学院では、それができる環境が整っています。頑張ってください。

文学研究科沿革

1900年(明治33年) ● 私立京都法政学校発足。翌年、上京区三本木の仮校舎から同・広小路学舎に移転。
1922年(大正11年) ● 旧制大学令に基づく「立命館大学」の設立が認可される。
1948年(昭和23年) ● 新制立命館大学の発足認可。法文学部より文学部が独立。
1950年(昭和25年) ● 大学院、文学研究科設置。
1977年(昭和52年) ● 衣笠キャンパスに新「清心館」を竣工。
2004年(平成16年) ● 文学部の各学科を人文学科に統合。
2006年(平成18年) ● 文学研究科の各専攻を人文学専攻に統合。博士課程前期課程に3コース制導入。
2014年(平成26年) ● 文学研究科に行動文化情報学専攻を設置し、2専攻15専修とする。
「研究一貫コース」「高度専門コース」の2コース制に移行。

教員・学生の動向

文学研究科教員数(2017年4月現在)

	教授	准教授	合計
人文学専攻	55	14	69
行動文化情報学専攻	27	3	30
合計	82	17	99

学生数(2017年5月1日現在。行動文化情報学専攻は2014年度設置)

		1回生	2回生	3回生以上		合計
前期課程	人文学専攻	45	41	8		94
	行動文化情報学専攻	25	22	3		50
		1回生	2回生	3回生	4回生以上	合計
後期課程	人文学専攻	20	18	15	28	81
	行動文化情報学専攻	2	6	4	7	19

入学者数の推移(2017年5月1日現在。行動文化情報学専攻は2014年度設置)

課程	専攻		2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
前期課程	人文学専攻	志願者	113	102	89	63	62	70	69
		合格者	74	60	56	42	40	50	48
		入学者	58	49	49	33	34	39	40
	行動文化情報学専攻	志願者	－	－	－	30	23	32	31
		合格者	－	－	－	25	19	22	28
		入学者	－	－	－	22	15	19	23
後期課程	人文学専攻	志願者	26	14	27	18	21	18	20
		合格者	18	8	17	11	14	12	17
		入学者	17	8	17	11	14	12	15
	行動文化情報学専攻	志願者	－	－	－	8	6	6	1
		合格者	－	－	－	8	5	5	1
		入学者	－	－	－	7	5	5	1

科学研究費等の保有状況

文学部教員代表者の科学研究費助成事業(科研費)保有状況(2017年度)

種 目	件 数	金 額
基盤研究(B)	2	8,580,000
基盤研究(C)	17	20,150,000
基盤研究(C)特設分野研究	1	1,300,000
研究活動スタート支援	3	3,120,000
研究成果公開促進費(学術図書)	1	0
若手研究(B)	4	3,640,000
挑戦的研究(開拓)	1	7,540,000
挑戦的研究(萌芽)	2	2,990,000
特別研究員奨励費	4	4,420,000
合 計	35	51,740,000

学位授与件数

過去7年度分の学位授与件数

		2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
修士学位		46	57	51	49	52	44	47
博士学位	甲号	15	14	13	8	12	3	8
	乙号	3	0	3	2	0	3	4

甲号は博士課程後期課程在籍中に授与されたもの。乙号は博士課程後期課程在籍とは関係なく、授与されたもの。

国際交流

中国や韓国を中心に毎年、多くの留学生を受け入れています。広東外語外貿大学(中国)、高麗大学校(韓国)、東西大学校(韓国)、ランカスター大学(イギリス、心理学専修のみ)とDMDP(共同修士学位プログラム)の協定を結んでいるほか、上海師範大学旅游学院(中国)と学術交流協定を結んでいます。

文学研究科留学生数(2017年度)

	正規生	研究生等	計(人)
中華人民共和国	55	5	60
台湾	1	1	2
大韓民国	11	1	12
イギリス	1		1
イタリア	1	4	5
スペイン	2		2
インドネシア	1		1
タイ王国	1		1
トルコ	1		1
オランダ		1	1
ドイツ		1	1
ハンガリー	1		1
フランス		3	3
合 計	75	16	91

学術雑誌一覧

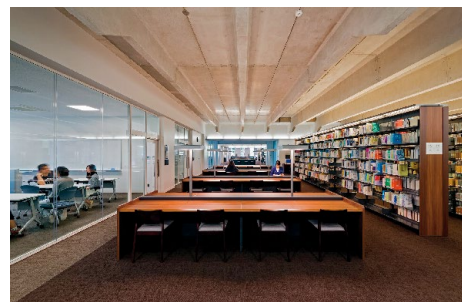
2018年3月31日現在

学 会 名	雑 誌 名	巻 / 号
立命館大学哲学会	『立命館哲学』	29
立命館大学日本文学会	『論究日本文学』	107
中國藝文研究會	『學林』	65
立命館東洋史學會	『立命館東洋史學』	40
立命館大学英米文学会	『立命館英米文学』	27
立命館史学会	『立命館史学』	38
立命館大学考古学論集刊行会	『立命館大学考古学論集』	6
立命館大学考古学論集刊行会	『立命館大学考古学資料集』	5
立命館地理学会	『立命館地理学』	29
立命館人文学会	『立命館文學』	656

図書館

衣笠キャンパスには、平井嘉一郎記念図書館のほか、人文系文献資料室、修学館リサーチライブラリーという研究用図書を所蔵する図書室があります。

立命館大学衣笠図書館には2016年4月現在、100万冊をこえる図書・製本雑誌が所蔵されています。東洋の文字文化研究者として著名な白川静の蔵書「白川静文庫」、古代ギリシャ史研究者として著名な「原随園旧蔵書」、哲学者として著名な「船山信一旧蔵書」、戦後を代表する日本文化研究者である加藤周一氏の蔵書「加藤周一文庫」も含まれています。



人文系文献資料室は、人文科学分野の研究資料を所蔵しています。和装本・漢籍・明治大正本・埋蔵文化財発掘調査報告書など専門性の高い資料を多く保存しています。

修学館リサーチライブラリーは、社会科学分野と外国語関係の研究資料を所蔵しています。いずれも閲覧室を併設しており、研究・学習に利用できます。

このほか、びわこ・くさつキャンパス（BKC）、朱雀キャンパス、大阪いばらきキャンパス（OIC）、立命館アジア太平洋大学（APU）に所蔵している蔵書についても閲覧し、借用することができます。

文学研究科が深く関わる研究施設

アート・リサーチセンター

立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）は、私たち人類が持つ文化を後世に伝承するために、芸術、芸能、技術、技能、技巧を中心とした有形無形の人間文化の所産を、歴史的、社会的視点から研究・分析し、記録・整理・保存・発信することを目的としています。

デジタル・アーカイブを基盤とした研究・教育活動の中で、国内外において蓄積してきた大量の文化財（古典籍）・美術品（浮世絵・工芸品）、無形文化（伝統芸能）、地理空間情報（地図・地域統計・地誌）やその他の文化資源（ビデオゲームや日本映画・テレビCMなども含むデジタル資源）などの日本文化資源のデジタル・アーカイブを有しています。

特に、行動文化情報学専攻文化情報学専修では、アート・リサーチセンターで進めるプロジェクトに参加することを授業に組み込んでいます。



歴史都市防災研究所

立命館大学歴史都市防災研究所は、これまで文化遺産の宝庫とも言うべき京都・滋賀を拠点として、芸術と文化の保全と、それを支える環境とコミュニティを含めた災害対策とを、一体の物として捉える「文化遺産防災学」の教育・研究を推進するために、2003年の歴史都市防災研究センター設立以降、文部科学省21世紀COEプログラム、同グローバルCOEプログラム等の外部資金を積極的に獲得しながら、文理を連携させた研究活動を行ってきました。研究所1階には展示ルームがあり、古史料や防災関連資料の展示、研究成果の公表をしています。ご希望の方は、地震災害時のドキュメント映像などをご覧ください。



人文科学研究所

人文科学研究所は、1948年4月新制立命館大学の発足とともに、本学における人文科学・社会科学全般にわたる総合研究、共同研究の推進母体として設立されました。

研究所は、総合大学の研究力を活かして日本と世界の現代的な課題を中心に、1年～5年の期間でプロジェクト研究を進めています。

斬新な着眼点と先進的な発想で研究を進め、その成果を学術図書、紀要などに発表しています。

白川静記念東洋文字文化研究所

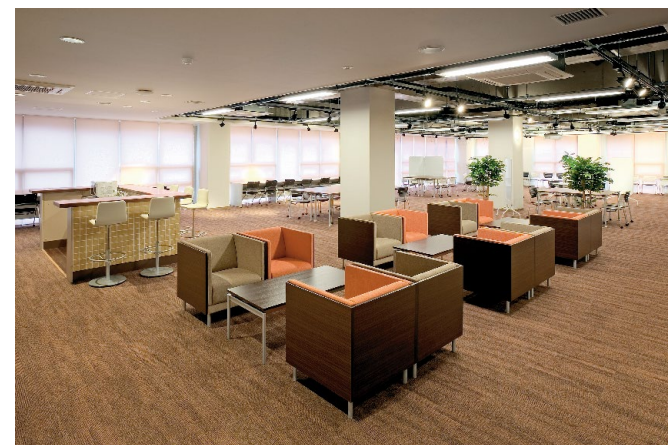
立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所は、東洋の文字文化について高度な研究業績を持つ、文化勲章受賞者の故白川静立命館大学名誉教授の研究成果を元に、東洋文字文化について広く社会一般を対象とした教育と普及を行い、また学術研究の分野において東洋文字文化研究の振興と高度化を図ることを、その設立目的としています。

研究所が長年にわたって主催してきた市民講座「立命館土曜講座」は、2003年度以降立命館大学衣笠総合研究機構にその企画運営および主催が引き継がれ、発足当時から趣旨である「大学の研究成果の社会還元」を受け継いで進められています。

研究所では、白川名誉教授の著書や研究成果の社会への普及を目的とした活動を行っています。また、東洋文字文化研究において有為な人材を奨励支援することを目的とした「立命館白川静記念東洋文字文化賞（略称「立命館白川静賞」）」を設けています。

大学院共同研究室（究論館）

究論館には、博士課程前期課程、後期課程それぞれに共同研究室が設置され、大学院生は各自の机が割り当てられます。それぞれの共同研究室は、大学院生の学生証で解錠されるカードキーのシステムがとられています。また、ロッカーと書棚が設置され、私物や本を常置することも可能です。一般の方は自由に出入りすることはできませんが、見学を希望する方は、大学院生にお願いしてみてください。



大学院生が学部生をサポートするTA制度

大学院生は希望すれば、学部の授業をサポートするTA（ティーチング・アシスタント）として働くことも可能です。TAは教員とともに大学教育を補佐および援助することを通じて、本学の教育の向上に資するだけではなく、TAとしての経験を通じて自らの教育力を高めることで、大学院生自身のキャリア形成を助けることになります。実際に、TAを通じて授業内のコミュニケーションを図ることが、受講生の授業理解度の向上に役立つといった授業アンケート結果が表れており、TAは大きな役割を果たしています。TAはアルバイトとして雇用されますので、時間数に応じた賃金が支払われます。

